第２次北広島町神楽振興計画

（令和８年度～令和１７年度）

～神楽文化が花ひらくまち　北広島～

令和８年（2026 年）３月

北　広　島　町

はじめに

北広島町は、中国地方の中山間地域に位置し、豊かな自然と歴史に育まれた伝統文化を大切に守り続けてきたまちです。なかでも神楽は、秋の実りへの感謝を込めて神に奉納される舞として、60 を超える神楽団体が活動する全国でも類を見ない「神楽のまち」として知られています。

平成 27（2015）年に第 1 次北広島町神楽振興計画を策定してから 10 年が経過しました。この間、新型コロナウイルス感染症の流行により、神楽公演や奉納行事が長期にわたり中止・延期を余儀なくされ、地域のつながりが試される厳しい時期がありました。また、少子高齢化の進行に伴い、神楽団の担い手不足や団員の高齢化がさらに深刻化するなど、神楽を取り巻く環境は大きく変化しています。

一方で、広島市内における神楽公演にはインバウンド観光客が増加し、ユネスコ無形文化遺産に登録された「壬生の花田植」とあわせて、神楽は地域の活性化と観光振興の両面で大きな可能性を有しています。こうした追い風を活かしながら、神楽文化を次世代に確実に継承し、地域の誇りとして発展させていくことが求められています。

このたび、神楽団現況調査、神楽団員アンケート、町民アンケート、関係者ヒアリングなど、多角的な調査・分析の結果を踏まえ、新たに「第 2 次北広島町神楽振興計画」を策定いたしました。本計画では、「神楽文化が花ひらくまち 北広島」を基本理念に掲げ、10 年後の目指す姿を見据えながら、前半 2 年間は地方創生交付金を活用した戦略的な事業展開を図り、後半 8 年間は自立的・持続的な神楽振興の仕組みを確立してまいります。

町民の皆様をはじめ、神楽団の皆様、関係機関の皆様のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和 8 年（2026 年）3 月

北広島町長　箕　野　博　司

目　　次

第１章　計画の概要 1

1　計画策定の趣旨 1
2　計画の位置づけ 2
3　計画の期間 2
4　計画の策定体制 3

第２章　北広島町の神楽を取り巻く現状と課題 4

1　北広島町の人口推移 4
2　北広島町の神楽団の現況 5
3　神楽団員の意識 12
4　北広島町民の神楽に対する意識 15
5　ヒアリング調査からみる現況 18
6　第１次振興計画の振り返り 20
7　観光振興をめぐる課題 20
8　現状からみた課題 21

第３章　計画の基本事項 22

1　基本理念 22
2　本計画における神楽振興の捉え方 22
3　目指す姿（将来像） 23
4　政策目標 24
5　計画の体系 24
6　フェーズ別の重点方針 25

第４章　施策の展開 27

政策目標Ⅰ　神楽の担い手確保と次世代育成 27
政策目標Ⅱ　伝統文化の継承と技芸の向上 28
政策目標Ⅲ　上演機会の拡大と認知度向上 29
政策目標Ⅳ　神楽を核とした観光振興と経済循環 30
政策目標Ⅴ　連携体制の強化と地域の誇りの醸成 32

第５章　計画の着実な推進と進行管理 33

1　成果指標（KPI） 33
2　計画の着実な推進 34
3　計画の進行管理 34

資料編 35

1　北広島町神楽振興計画策定委員会 名簿 35
2　計画策定の経過 35
3　北広島町神楽団の現況調査結果 36
4　神楽団員の意識調査結果 38
5　町民の神楽に対する意識調査結果 38
6　ヒアリング調査結果からみる現状 40
7　本町の神楽活動団体マップ 42
8　用語解説 44

第１章　計画の概要

１　計画策定の趣旨

北広島町（以下「本町」という。）は、古くから稲作文化と深く結びついた歴史と風土を有する地域です。本町の神楽は中世以来の長い歴史があり、当時、本町の一部は宮島・嚴島神社の荘園であり、空海（弘法大師）ゆかりの大聖院が祭祀を執り行っていました。

こうした宗教的・文化的な土壌の上に、秋の収穫への感謝を込めて神に奉納する舞として神楽が発展し、神話や伝説を題材にした神事芸能として脈々と受け継がれてきました。

神楽の演目は、古事記や日本書紀に描かれる神話・伝説を題材としたものが中心であり、天の岩戸、八岐大蛇、大江山などの物語が華麗な衣装と力強い舞で表現されています。各神楽団は独自の演目レパートリーや舞の型を有しており、地域ごとの特色が継承されています。

本町の神楽は、石見神楽や備後神楽などの系譜を引く広島県西部の神楽文化圏に位置し、特に「旧舞」と呼ばれる格式高い古典的な舞と、華やかな演出を取り入れた「新舞」が共存している点が特徴的です。町内には 60 以上の神楽団が存在し、全国最多の神楽団数と言われており、本町の重要な文化資源の一つです。

平成 27（2015）年に策定した第 1 次北広島町神楽振興計画（以下「第 1 次計画」という。）から 10 年が経過し、この間に神楽を取り巻く環境は大きく変化しました。

新型コロナウイルス感染症の流行により神楽公演や奉納行事が長期にわたり中止・延期を余儀なくされるなど、神楽団の組織運営はより厳しさを増しています。2013 年には 72 団体あった神楽団は 2025 年には 64 団体に減少し、町内最大規模の芸石神楽競演大会の観客数も最盛期の 2,000 人超から 2025 年には 370 人にまで減少しています。一方で、広島市内での神楽公演にはインバウンド観光客が増加しており、広島県内の外国人宿泊者数は 2019 年の 132 万人から 2024 年には 197 万人へと約 1.5 倍に伸びています。

本町が誇るもう一つの伝統芸能である「壬生の花田植」は 2011 年にユネスコ無形文化遺産に登録されており、神楽と花田植はともに稲作文化に根ざした「生きた文化」として、地域の活性化と観光振興の両面で大きな可能性を有しています。

こうした背景のもと、本町では、令和 7（2025）年度に神楽団現況調査、神楽団員の意識調査、町民の神楽に対する意識調査、神楽団・関係者へのヒアリング調査を実施し、多角的なエビデンスに基づく政策立案を行いました。これらの調査結果と分析を踏まえ、神楽文化の確実な継承と発展を図るため、新たに「第 2 次北広島町神楽振興計画」（以下「本計画」という。）を策定します。

2　計画の位置づけ

本計画は、北広島町長期総合計画の個別計画として策定するものであり、国および広島県の文化振興関連施策を踏まえつつ、本町の関連計画と整合・連携を図ります。

まず、第 3 期北広島町総合戦略における基本目標 2「キタを体感する交流・定住と次代を担うひとづくりの推進」との連動です。同戦略では、「ひとを呼び込む『きたひろしまの魅力』発信」を施策の方向として定め、伝統芸能を活用した交流促進と地域・経済の活性化を図ることとしています。

次に、第 3 次北広島町観光振興まちづくり計画との連携を図ります。同計画では観光消費額を 2026 年度に 27.9 億円、観光入込客数を 174 万人とすることを目標としており、神楽を活用した観光振興は目標達成のための重要な柱の一つです。

3　計画の期間

本計画の計画期間は、令和 8（2026）年度から令和 17（2035）年度までの 10 年間とします。計画期間は、以下の 2 つのフェーズで構成します。

区分	期間	概要
フェーズ 1（前期）	令和 8～9 年度（2026～2027 年度）	国の地方創生交付金事業と連動した戦略的展開期
フェーズ 2（後期）	令和 10～17 年度（2028～2035 年度）	自立的・持続的な神楽振興の展開期

なお、社会環境の変化や事業の進捗状況に応じて、中間年度（令和 12 年度）に計画の見直しを行うものとします。

4　計画の策定体制

（1）北広島町神楽振興計画策定委員会

学識経験者、神楽関係者、行政関係者等で構成する「北広島町神楽振興計画策定委員会」を設置し、計画内容の審議を行いました。

（2）調査の実施

次期計画に向けた基礎資料として、以下の 4 つの調査を実施しました。

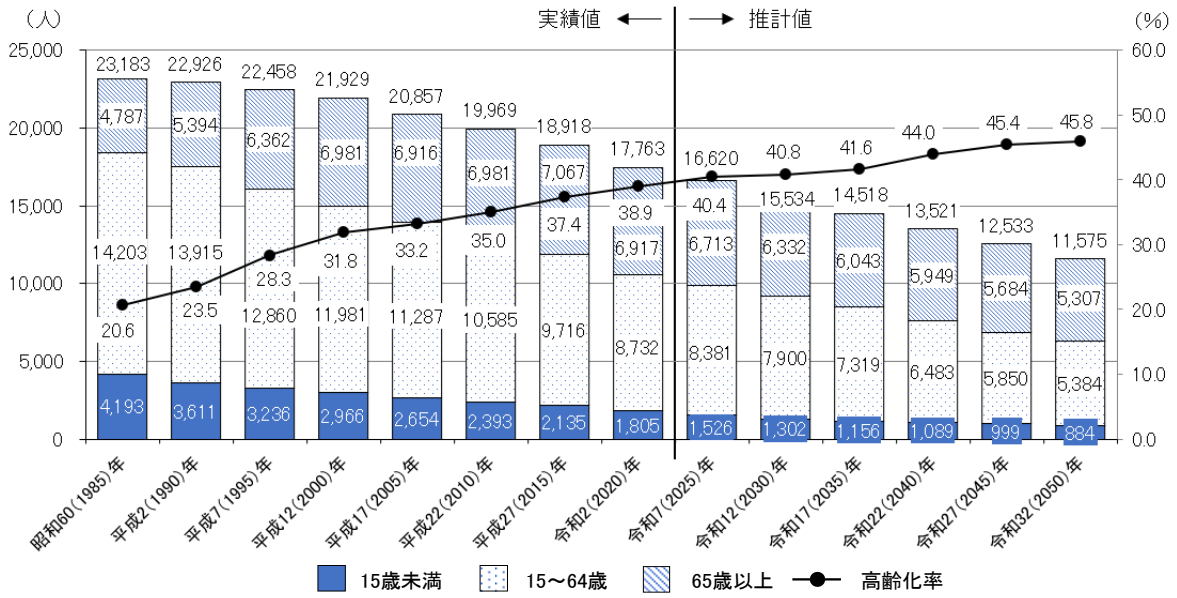
調査名	対象	実施時期
神楽団現況調査	町内 47 神楽団（回収率 95.7%）	2025 年 11 月
神楽団員アンケート調査	神楽団員（有効回答 253 人）	2025 年 12 月～2026 年 1 月
町民アンケート調査	町公式 LINE 登録者（有効回答 351 人）	2025 年 11 月
神楽団・神楽関係者へのヒアリング調査	9 神楽団・関係事業者等	2025 年 11 月～2026 年 2 月

第２章　北広島町の神楽を取り巻く現状と課題

１　北広島町の人口推移

本町では、人口減少と高齢化が急速に進行しており、いわゆる「超高齢化地域」となっています。令和 2（2020）年の国勢調査では 17,763 人であった総人口は、令和 7（2025）年には 16,620 人、令和 12（2030）年には 15,534 人、令和 22（2040）年には約 13,521 人に減少する見込みです。令和 32（2050）年には約 11,575 人にまで減少すると推計されており、今後 30 年間で約 5,000 人が減少する深刻な状況にあります。

特に、生産年齢人口（15～64 歳）の減少が顕著であり、令和 2（2020）年の 8,732 人から令和 22（2040）年には 6,483 人に減少する見通しです。一方、65 歳以上人口の割合は上昇を続け、令和 7（2025）年には高齢化率が 40.4%を超え、その後も 45%前後まで高まると推計されています。15 歳未満の年少人口も令和 2（2020）年の 1,805 人から令和 22（2040）年には 1,089 人にまで減少する見通しです。



図：北広島町の人口推移

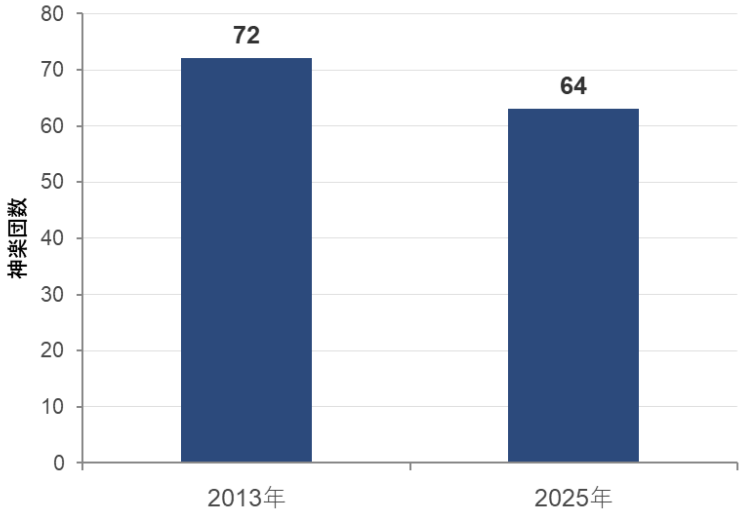
【資料】令和 2（2020）年までは国勢調査の実績値、令和 7（2025）年から令和 32（2050）年は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（令和 5（2023）年推計）」

この人口構造の変化は、地域コミュニティの維持や経済活動のみならず、伝統文化の継承にも直接的な影響を及ぼしています。特に若年層の町外流出と相まって、神楽団への新規加入者の減少は深刻化しており、後述する定量分析の結果からも、人口構造の変化と神楽団の活動水準の低下が密接に連動していることが明らかになっています。

2　北広島町の神楽団の現況

（1）神楽団数の推移

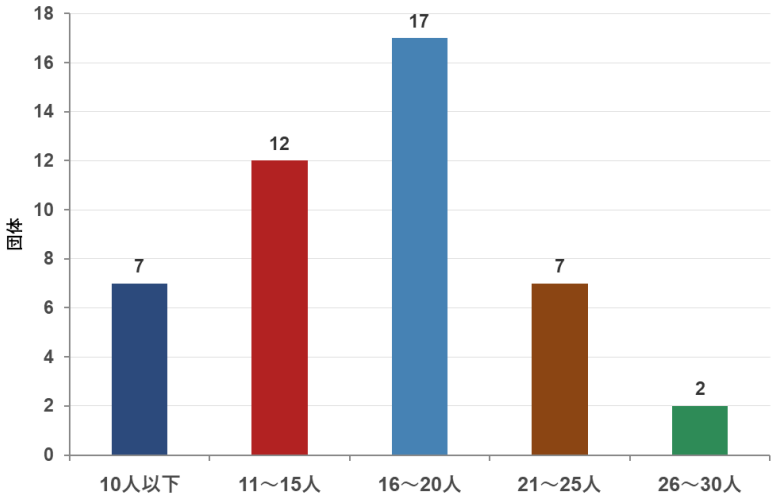
本町の神楽団体数（子ども神楽団、高校の神楽部/同好会、女性神楽同好会を含む）は、2013 年の 72 団体から **2025 年には 64 団体へと 8 団体減少**しています。また、神楽団は豊平地域、千代田地域、大朝地域、芸北地域の 4 地域に分布しており、各地域の伝統と特色を継承しながら活動を続けています（北広島町神楽協議会 発行『2026 年度北広島町神楽スケジュール』）。



図：神楽団数の推移

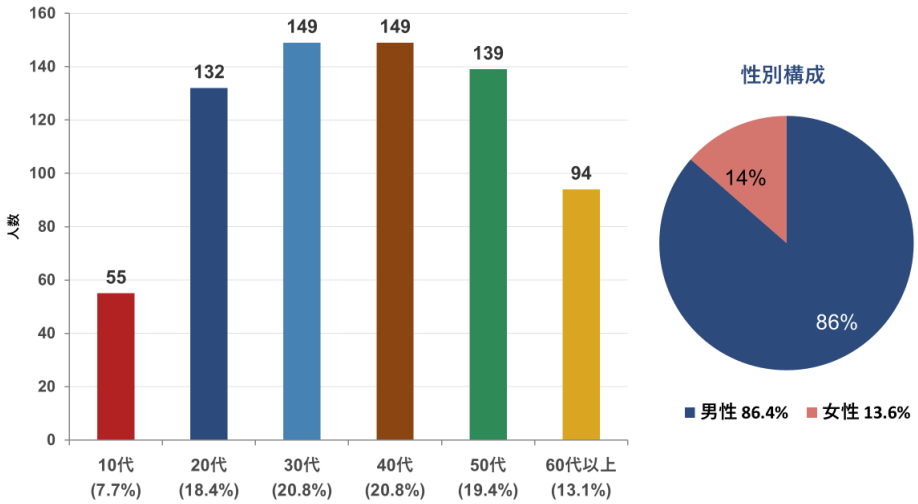
（2）団員構成

北広島町神楽協議会に加盟する 47 団体を対象とした現況調査（回収率 95.7%、45 団体回答）によれば、一神楽団当たりの平均団員数は 16.2 人（標準偏差 5.1 人）であり、最小 7 人から最大 29 人まで分布しています。**16～20 人の団体が 17 団体（37.8%）と最多**で、21 名以上の団体は 9 団体（20.0%）、10 人以下の小規模団体は 7 団体（15.6%）存在しています。



図：団員の人数構成（2025 年）

性別構成は男性 86%、女性 14%であり、**年代構成は 20 代から 50 代がバランスよく分布しているものの、10 代は全体の 7.7%にとどまり、次世代育成が課題**となっています。前回調査（2015 年）との比較では、10 代から 40 代が減少し、50 代以上が増加しており、団員の高齢化が進行しています。



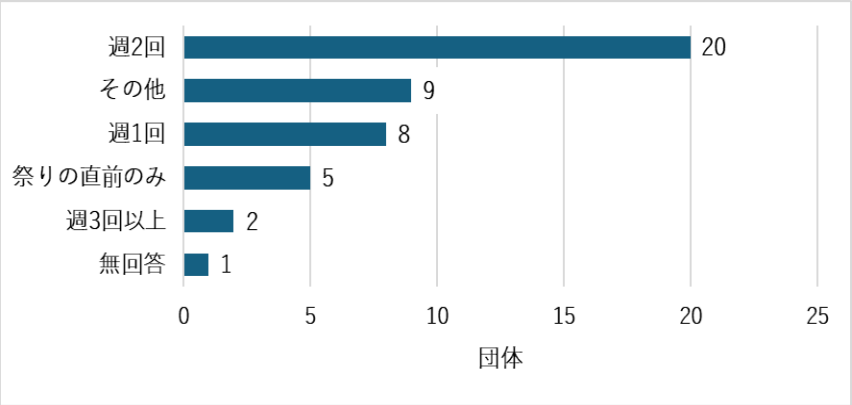
図：団員の年代・性別構成（2025 年）

（3）活動状況

■ 練習状況

週 2 回以上の練習を行う団体が約半数（20 団体）を占めています。「週 1 回以上」の練習を含めると **30 団体（66.6%）が恒常的な練習体制を維持**しています。

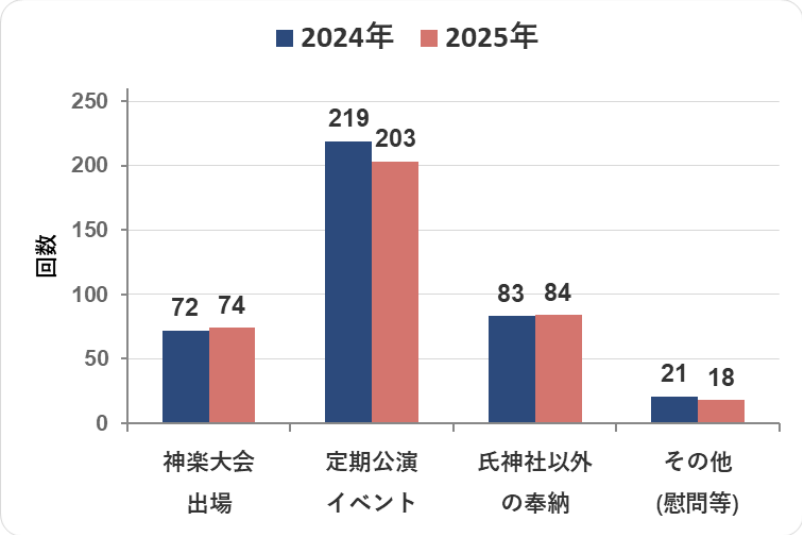
また、団員総数と練習頻度の相関関係をみると、団員が多い神楽団ほど練習頻度が高いという強い正の関係が確認されました（r=0.675）。



図：練習頻度（2025 年）

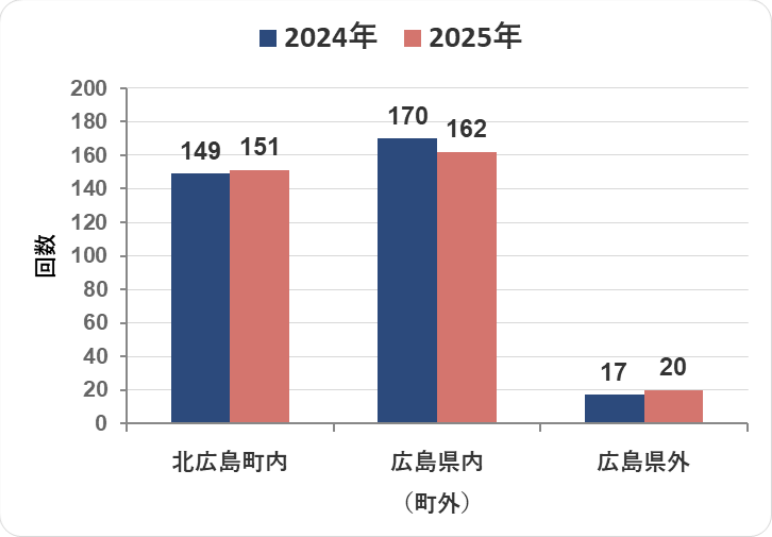
■ 出演状況

45 団体の出演数を種類別にみると、2024 年・25 年ともに**定期公演が最多（200 回以上）**で、氏神神社以外の奉納、神楽大会と続いています。



図：出演種類別の年度比較

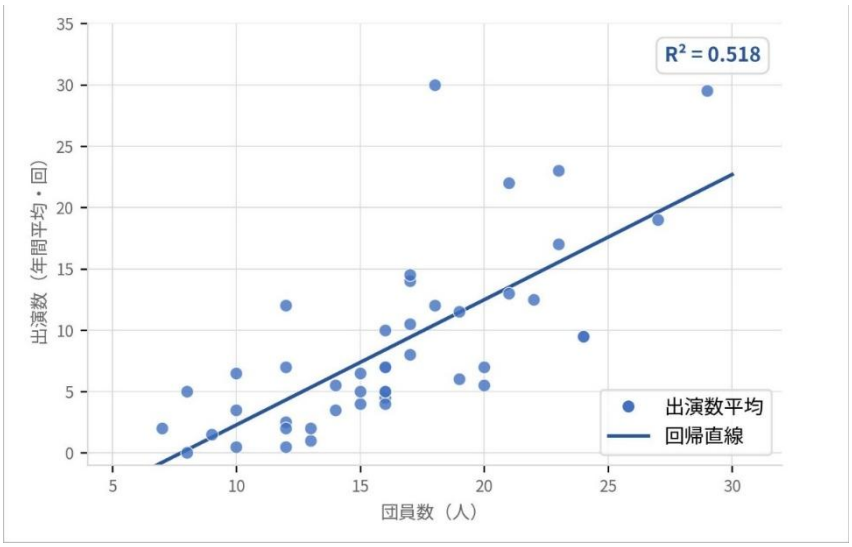
出演場所では、2024 年と 2025 年ともに北広島町を除いた**広島県内での上演が町内をやや上回る結果**となりました。



図：出演場所別の年度比較

■ 団員規模が出演数に影響

45 団体の年平均の出演回数は 8.6 回ですが、団体間の格差が大きくなっています。団員数と出演数（2024 年と 2025 年の平均）の関係をみると、相関係数は 0.720 と強く、団員規模と出演数は比例関係にあります。また、出演数を規定する要因の分析では、団員総数が強い説明力（R^2=0.518）を示しました。これは、**規模の大きな神楽団ほど多くの出演機会に対応可能であることを示唆しています。**



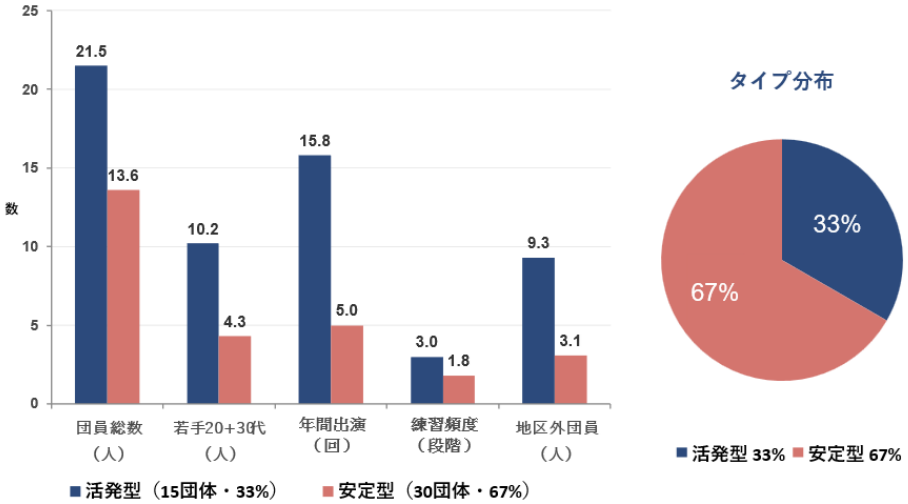
図：団員規模と出演数の関係

■ 神楽団のタイプ別構造（クラスター分析）

団員総数、若手(20 代+30 代)、出演平均、練習頻度、地区外の団員数、保持演目数をクラスタリング変数とするクラスター分析を行ったところ、シルエット係数 0.357 で神楽団は 2 つのタイプ（クラスター）に分類されました。

すなわち**大規模で若手が多く、練習・出演ともに活発で地区外の団員も多い「活発型」（15 団体・33%：平均団員数 21.5 人、年間出演 15.8 回）**の神楽団と団員数が**小～中規模で活動量が控えめな「安定型（維持・継続タイプ）」**（30 団体・67%：平均団員数 13.6 人、年間出演 5.0 回）の 2 グループに分かれました。

安定型の神楽団の一部は「規模の罠」に陥っている可能性があります。すなわち団員数の少なさが練習頻度の低下・出演機会の減少・SNS 発信力の不足といった複数の課題が連鎖的に作用し、さらなる団員減少を招く悪循環に陥る構造的問題が今後、進行する可能性があります。

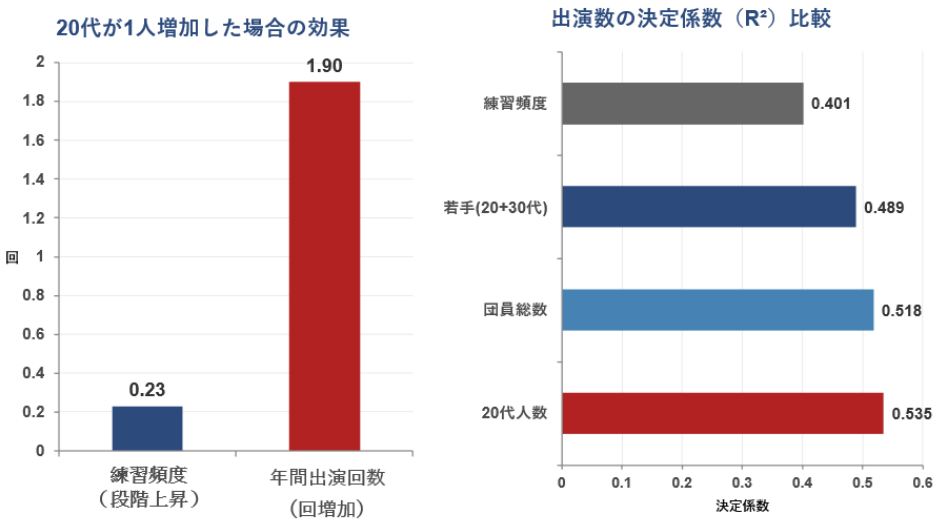


図：神楽団のタイプとタイプ別の構造

（4）20 代人材の重要性

回帰分析の結果、**20 代の団員数が神楽団の活動を左右する最重要因子**であることが判明しました（R^2=0.535）。**20 代が 1 人増加すると、練習頻度が 0.23 段階上昇し、年間出演回数が約 1.9 回増加するという定量的な効果が確認されました。**若手人材の確保が神楽団の活力維持に不可欠であることを、データが裏付けています。しかし、現実には 20 代人材の確保は容易ではありません。若年人口の流出、神楽以外の余暇活動の多様化、進学・仕事・家庭との両立の困難さなど、複合的な要因が若手の参加を妨げていると考えられます。従来の「地縁・血縁」に頼った人材確保だけでは限界があり、新たなアプローチ

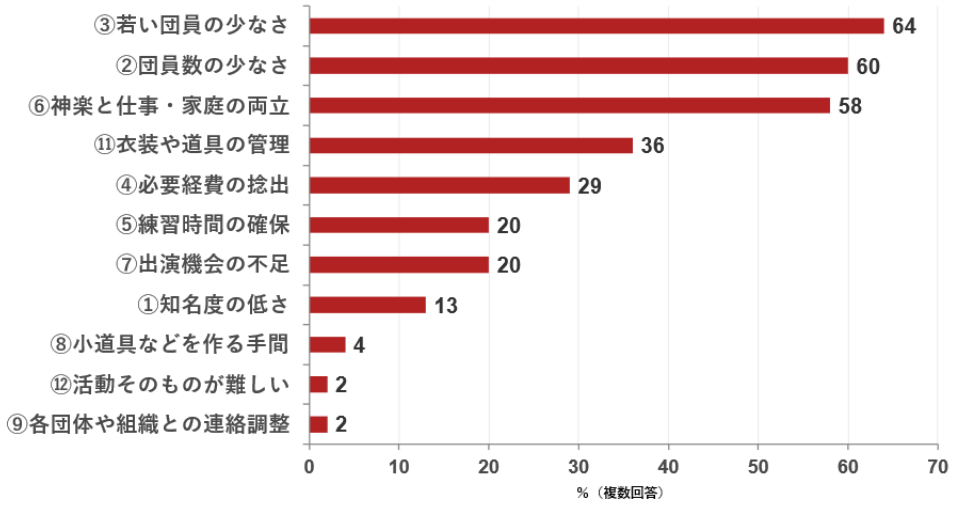
が求められています。



図：神楽団の活動規定要因（単回帰分析・重回帰分析）

（5）課題認識

神楽団が抱える課題としては、「若い団員の少なさ」（64%）、「団員数の少なさ」（60%）、「神楽と仕事・家庭の両立」（58%）が上位を占め、**人材確保と活動継続の両立が最大の課題**となっています。（複数回答　n=45「特になし」5 団体を除く）



図：神楽団の課題認識

神楽団の課題認識（複数回答）を地域別にみると下記のように整理されます。

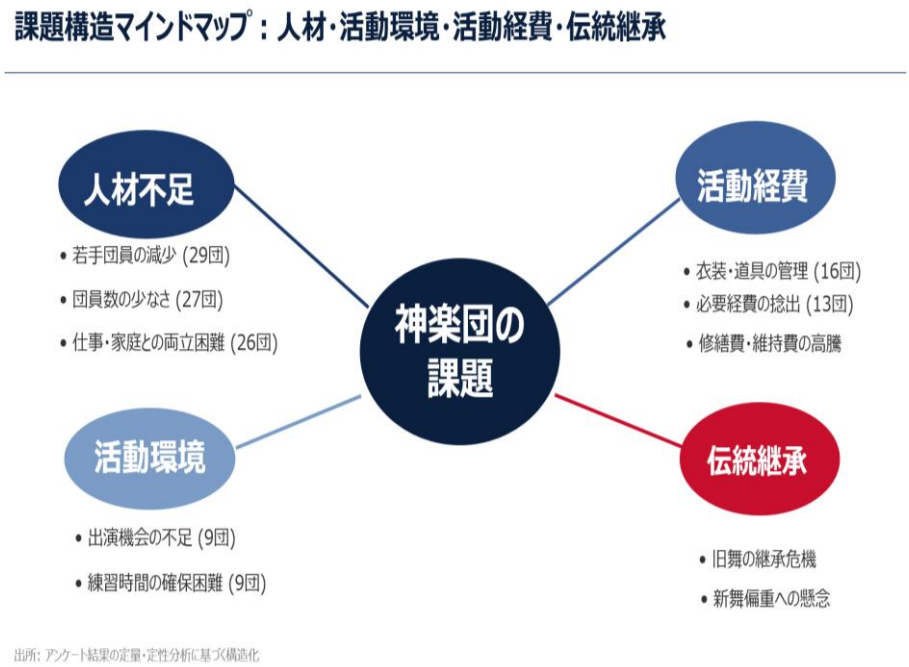
【千代田地域】「団員数の少なさ」（10 団）が最多で「仕事・家庭との両立」（8 団）、「若い団員の少なさ」（6 団）が続いています。

【芸北地域】「若い団員の少なさ」（12 団）が最多で突出しており、「団員数の少なさ」「仕事・家庭との両立」が各 8 団で続きます。

【豊平地域】「若い団員の少なさ」（7 団）が最多で「出演機会の不足」（4 団）への言及が他地域より多い傾向があります。

【大朝地域】「仕事・家庭との両立」（6 団）が最多で「特になし」の回答も 2 団あり、比較的安定している団も存在しています。

神楽団の課題認識構造を可視化すると、下記の図のように表現することができます。



図：神楽団の課題認識マインドマップ

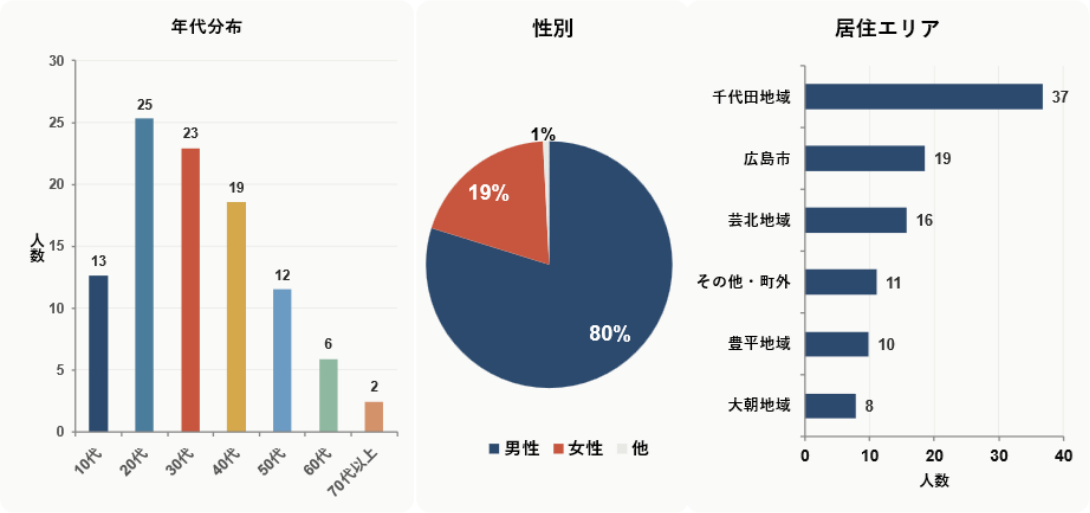
3　神楽団員の意識

神楽団員を対象に神楽の振興と観光活用に関するアンケート調査（実施期間：2025 年 12 月 1 日～2026 年 1 月 13 日。有効回答：253 人）を実施しました。

（1）回答者の属性

回答者の属性は、20 代（25.5%）、30 代（23.1%）、40 代（18.7%）、10 代（12.7%）、50 代以上（20%）で、性別は男性 79.8%、女性 19.4%となりました（「その他」「無回答」を除く）。

居住エリアは千代田地域（37.2%）が最多で、広島市（18.8%）、芸北地域（16.0%）、豊平地域（10.0%）、大朝地域（8.0%）と続き、町外在住者も少なくありません。



回答者の属性（n=253）

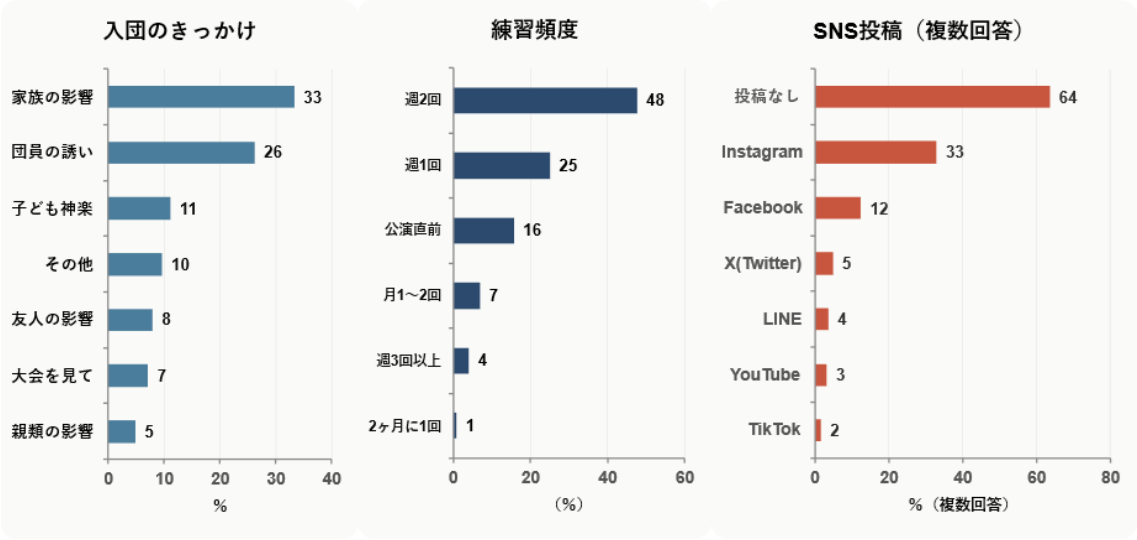
図：回答者（団員）の属性

（2）入団のきっかけと神楽活動の状況

入団のきっかけは「家族（親や兄弟・姉妹）の影響」（33.3%）が最多で、**神楽が家庭内で世代を超えて継承されている**ことが示されました。

練習頻度は「週 2 回くらい」（47.6%）最多であり、「週 1 回くらい」（25.0%）と合わせると **7 割以上が週 1 回以上の定期練習を行っています。**

SNS の投稿については、「投稿していない」（62.5%）が多数を占めていますが、Instagram に投稿している団員も 32.4%おり、若い世代を中心に情報発信が広がっています。

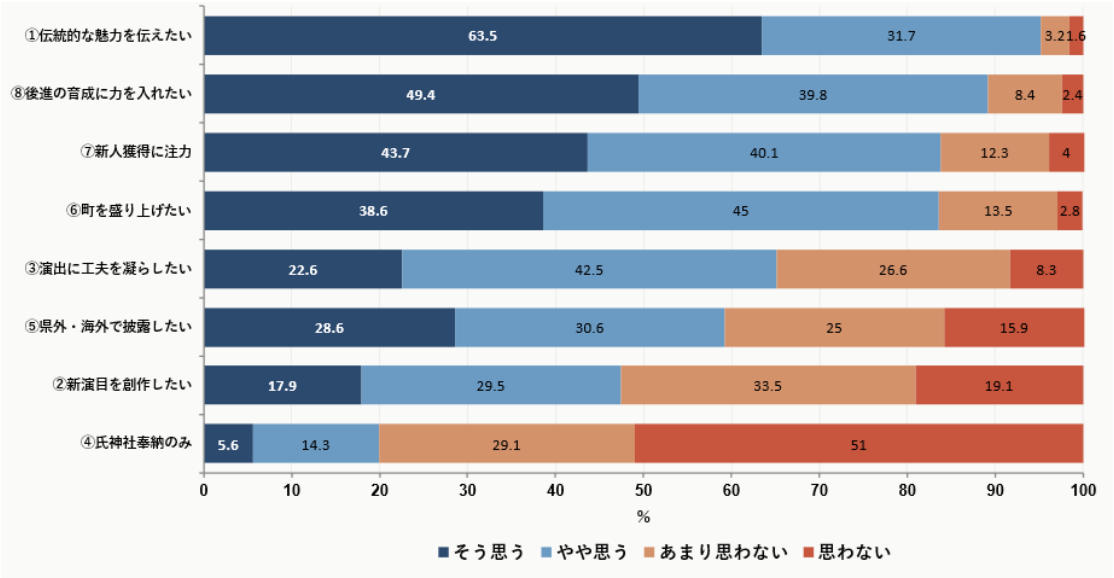


図：入団のきっかけと活動状況

（3）神楽活動への意向

「伝統的な神楽の魅力を伝えたい」（肯定率 95.2%）、「後進の育成」（89.2%）、「新人獲得」（83.7%）、「北広島町を盛り上げたい」（83.7%）への賛同が高く、つづいて約 6 割が「演出に工夫を凝らしたい」（肯定率 65.1%）、「県外や海外で神楽を披露したい」（肯定率 59.1%）、「新しい演目を創作したい」（肯定率 47.4%）など革新への姿勢や積極的な活動の展開を望む結果となりました。

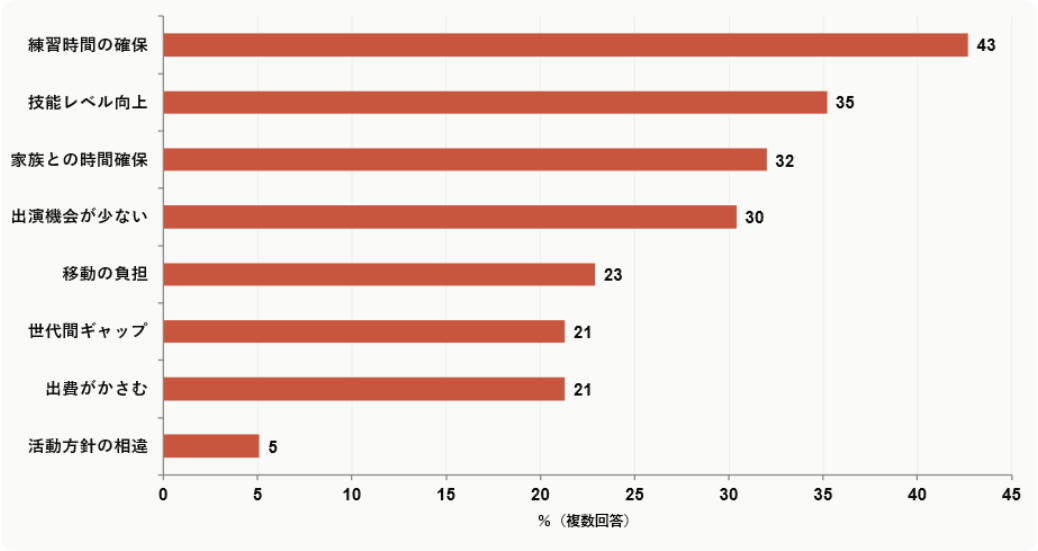
一方、「氏神神社の奉納のみにしたい」（19.9%）への賛同は低く、奉納限定志向は少数でした。



図：団員の神楽活動への意向

（４）神楽をするうえでの悩みや困りごと（複数回答）

最多は「練習に参加する時間の確保が難しい」（42.7%）で、仕事や生活と神楽活動の両立が団員レベルでも最大の課題となっています。続いて「技能レベルの向上」（35.2%）、「家族・パートナーとの時間確保」（32.0%）、「大会などへの上演機会が少ない」（30.4%）という活動上の課題が示されました。



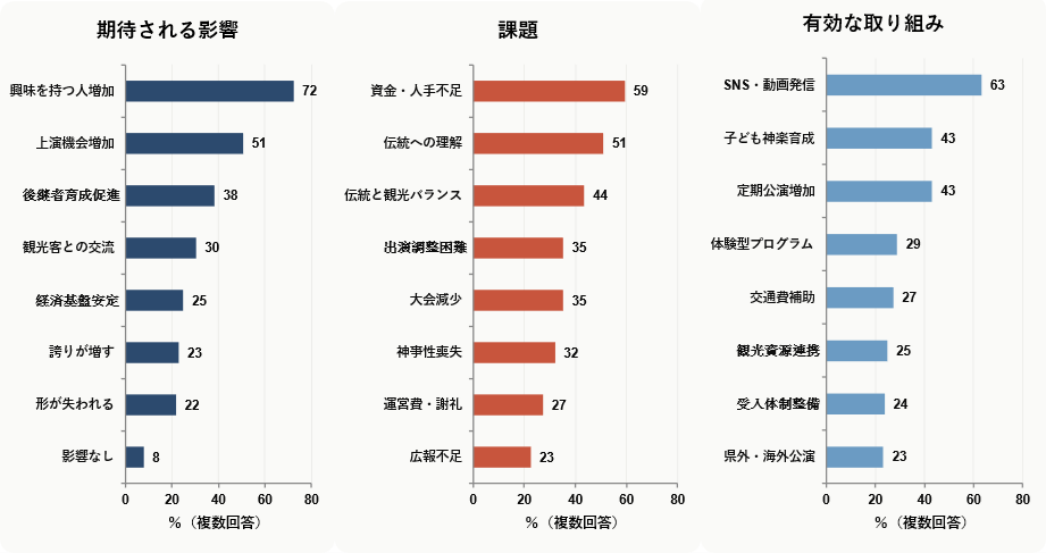
図：団員の神楽活動上の悩みや困りごと

（５）神楽の観光活用に関する意識（複数回答）

観光活用の影響として「神楽に興味を持つ人が増える」（72.3%）、「上演機会の増加」（50.6%）、「後継者の育成が進む」（38.3%）への期待が高いことが示されました。

課題としては「資金や人手の不足」（59.3%）、「伝統的な神楽への理解と尊重」（51.0%）が上位に挙がりました。

観光活用における有効な取り組みとしては、「SNS・動画サイトでの情報発信強化」（63.2%）が最多で、「定期公演やイベントの増加」と「子ども神楽の育成」がともに43.1%と続き、デジタル発信と上演機会の増加への期待が大きいことが示されました。



図：団員の神楽の観光活用に関する意識

（6）統計分析による主要結果

クロス集計分析によって、**若年層（10～20 代）は中堅・ベテラン層よりも観光活用の効果（上演機会増加 66.7%、SNS 発信支持等）に積極的である**ことが明らかになりました。

重回帰分析とロジスティック回帰分析の結果、若い年代ほど「新演目創作」「演出工夫」「県外・海外での披露」「地域貢献」への意向が高く、**女性の方が地域貢献・県外披露・後進育成に積極的な傾向がある**ことが明らかになりました。また「県外で披露したい」意向が強い人は県外・海外プロモーションを支持する確率が 3.2 倍高い結果になりました。

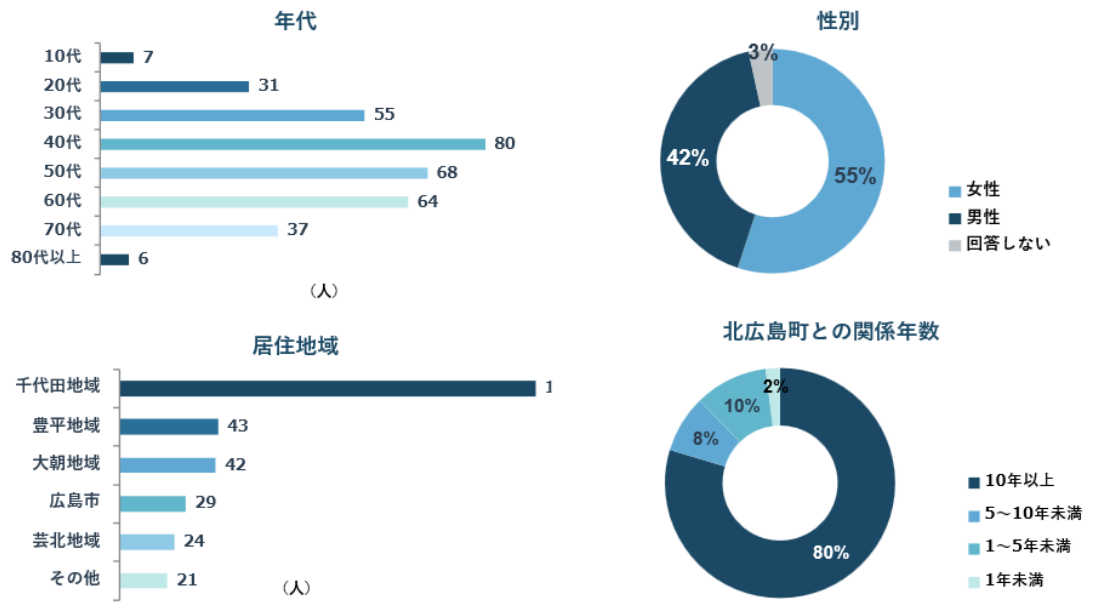
4　北広島町民の神楽に対する意識

町公式 LINE 登録者を対象とした町民の神楽に対するアンケート調査（実施期間：2025 年 11 月 17 日～30 日。有効回答：351 人）を実施しました。

（1）回答者の属性

年代は 40 代の 80 人（22.8%）が最多で、次いで 50 代（68 人・19.4%）、60 代（64 人・18.2%）、30 代（55 人・15.7%）、70 代（37 人・10.5%）、20 代（31 人・8.8%）80 代以上が 6 人（1.7%）となりました。性別は女性 192 人（54.7%）、男性 145 人（41.3%）で、女性が過半数を占める結果となりました。居住地域では、千代田地域（181 人・51.6%）が最多で、北広島町内 4 地域合計では 290 人（82.6%）を占めました。北広島町との関係年数は「10 年以上」が 278 人（79.2%）と大多数を占め、地域に根ざ

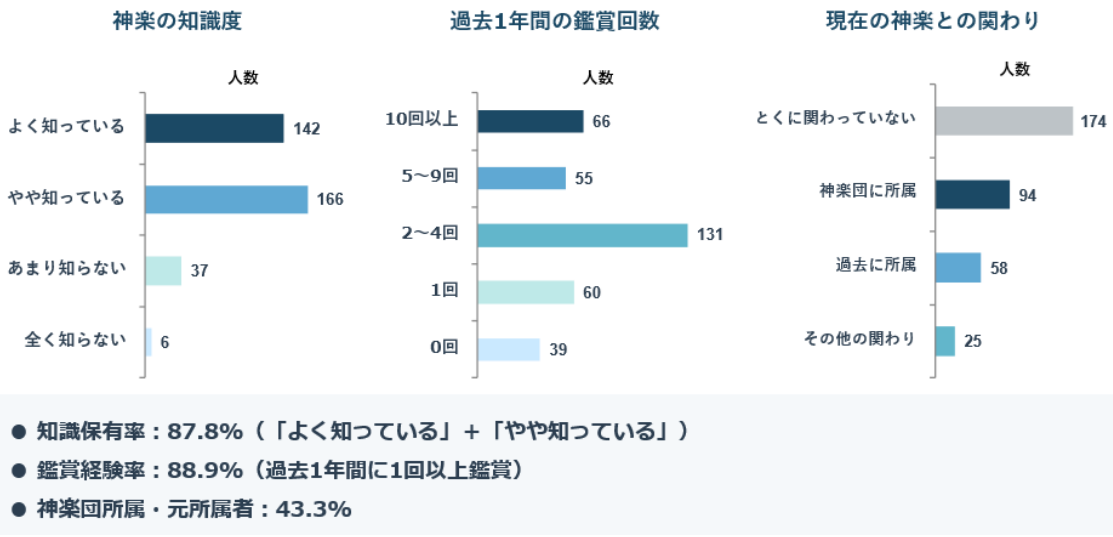
した住民層が回答しています。



図：回答者（町民）の属性

（2）神楽の知識度と関わり

神楽の知識度は**全体の 87.8%が何らかの知識を持ち、過去 1 年間の鑑賞経験者は 88.9%に上りました。**現在の神楽との関わりは「とくに関わっていない」が約半数（49.6%）でしたが、神楽団所属者・元所属者は 43.3%を占めていました。

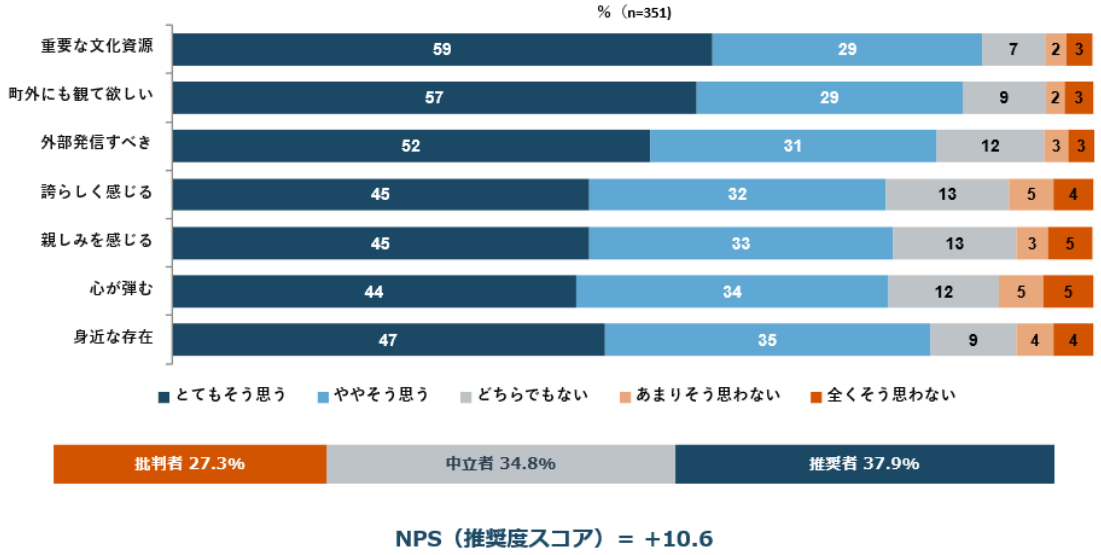


図：回答者（町民）の神楽の知識度と関わり

（３）神楽文化への意識・愛着

「神楽は地域の未来にとって重要な文化資源」への肯定率が 88.0%と最高で、外部発信意欲も８割を超えて高いことが示されました。

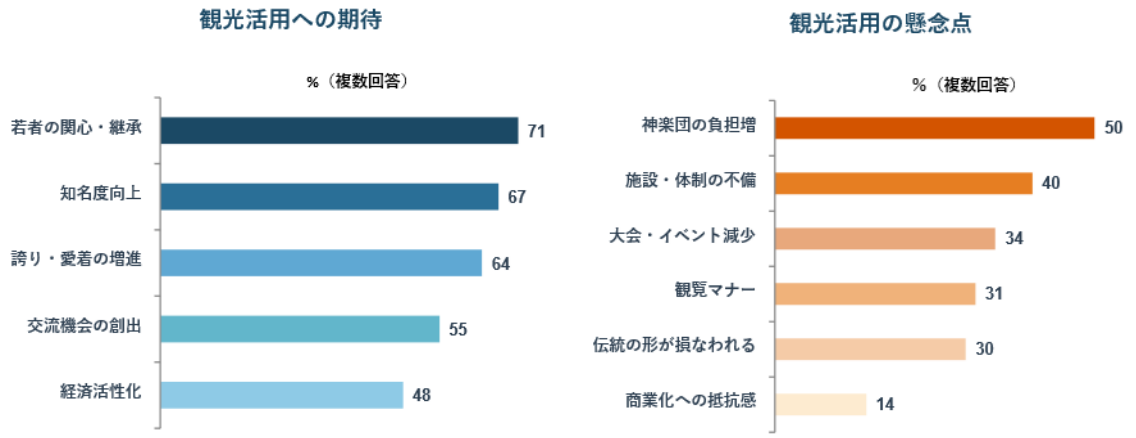
神楽の推奨度（NPS）は NPS＝+10.6 で、推奨者（37.9%）が批判者（27.3%）を上回っています。



図：回答者（町民）の神楽文化への意識と愛着

（４）観光活用への意識

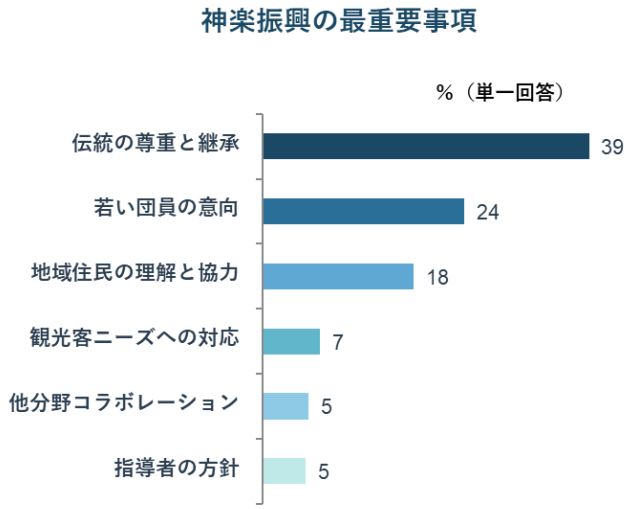
観光活用の期待は「若者の関心・継承」（70.9%）、「知名度向上」（67.0%）が上位を占め、観光活用による懸念は「神楽団の負担増」（49.6%）が最大でした。



図：回答者（町民）神楽の観光活用への期待と懸念

（5）神楽振興の意識

神楽振興の最重要事項は「伝統の尊重と継承」（38.7%）が最多となりました。また統計解析（回帰分析）の結果、神楽知識度と鑑賞回数が関与意向・文化意識スコアの双方に有意な正の影響を示しており、「知る・観る」機会の創出が神楽振興の重要な鍵であることが統計的に示されました。



図：回答者（町民）の神楽振興で重要視すること

5　ヒアリング調査からみる現況

（1）神楽団ヒアリング（9 神楽団）

9 団体へのインタビュー調査のテキスト分析を行った結果、「神楽」（427 回）を筆頭に、「公演」（179 回）「地域」（160 回）「団員」（100 回）が高頻度で登場し、**「課題」「不足」「若手」「後継」といった課題系ワードと、「観光」「連携」「継承」「文化」「伝統」といった振興系ワードが拮抗**していました。

図：頻出単語ワードクラウド

インタビュー全体から抽出された主要論点・サブトピックを 7 つの分岐で整理しました。

ブランチ	主な内容
担い手・後継者	団員不足・高齢化、若手育成、子ども神楽、女性参加、入団促進
公演・演目	奉納神楽、旧舞・新舞、演目継承、県外出演、公演依頼対応
観光・PR	インバウンド、字幕・解説整備、SNS 発信、定期公演、体験型観光
財政・資金	出演謝金、消耗品費、衣装費、行政支援、資金不足
地域連携	神楽団間連携、地域行事、町との協働、合同練習、広域展開
文化・伝統	系譜・流派、資料保存、衣装継承、奉納の意義、歴史継承
練習・組織	練習体制、デジタル活用、組織文化、指導者育成、施設環境

KJ 法的グルーピングにより、「A：担い手の確保と育成」、「B：公演・活動の持続可能性」、「C：観光・発信の強化」、「D：地域・行政との連携」、「E：環境・インフラ整備」、「F：文化・伝統の継承と革新」が主要な論点として整理されました。

各グループは相互に関連しており、例えば「A：担い手の確保と育成」は「B：公演・活動の持続可能性」と密接な関係にあり、また「F：文化・伝統の継承と革新」や「D：地域・行政との連携」とも連動しています。「C：観光・発信の強化」は「E：環境・インフラ整備」と緊張関係にあり、観光化と伝統保持のバランスが政策的な鍵となることを示唆しています。

（2）関係者ヒアリング

神楽に携わる幅広い関係者（北広島町観光協会 会長、神楽字幕の翻訳者、広島県民文化センター館長、神楽面師）を対象に、神楽の現状と課題認識、将来展望等についてヒアリングを行いました。調査の結果、「文化継承の危機」と「インバウンド機会」が 2 大テーマとして浮上しました。担い手・後継者不足は全員が最重要課題として認識し、インバウンド向けの神楽ツアーや多言語対応は即時着手可能な施策として評価されました。

6　第 1 次振興計画の振り返り

平成 27（2015）年に策定した第 1 次北広島町神楽振興計画は、神楽の継承と発展に向けた初めての体系的な計画でした。同計画では、担い手の育成、上演機会の確保、情報発信の強化などを柱として施策を展開しました。

第 1 次計画の成果としては、神楽協議会を中心とした連携体制の強化、子ども神楽教室の実施、一部のイベントにおける観光活用の試行などが挙げられます。しかしながら、計画期間中に新型コロナウイルス感染症の流行という想定外の事態が発生し、神楽公演や奉納行事が長期にわたり中止・延期を余儀なくされました。この結果、上演機会の減少、団員のモチベーション低下、若手の新規加入の停滞などが生じ、計画の目標達成は困難な状況となりました。

第 1 次計画からの主な教訓としては、①計画の実効性を確保するための財源的裏付けの重要性、②定量的な KPI に基づく進捗管理の必要性、③外部環境の変化に対応できる柔軟な計画運用の重要性、④観光振興との連携における推進体制の明確化の必要性、が挙げられます。本計画では、これらの教訓を踏まえ、地方創生交付金による財源の確保、ロジックモデルに基づく KPI 管理、フェーズ制による段階的展開による推進体制の強化を図ります。

7　観光振興をめぐる課題

第 3 次北広島町観光振興まちづくり計画では、観光消費額を 2026 年度に 27.9 億円、観光入込客数を 174 万人とすることを目標としています。しかし、直近の 2024 年における入込観光客は 163 万人、観光消費額は 20.43 億円（いずれも速報値）にとどまっており、目標との乖離が生じています。

8　現状からみた課題

以上の各種調査の結果を総合すると、本町の神楽を取り巻く課題は以下の 5 つの領域に整理されます。これらの課題は相互に関連しており、一つの課題への対応が他の課題の改善にも波及する構造となっています。例えば、若手人材の確保（課題①）は上演機会の拡大（課題③）につながり、上演機会の拡大は認知度向上を通じて新たな担い手の獲得に寄与するという好循環の可能性があります。本計画では、こうした課題の構造的な相互関連を踏まえた総合的な対策を講じていきます。

課題領域	具体的な課題
①担い手の確保・育成	・若手団員の減少が活動水準を直接的に低下させる構造 ・10 代の団員比率 7.7%にとどまり、次世代育成の仕組みが不十分 ・小規模団体（10 人以下：7 団体）の「規模の罠」による悪循環
②伝統文化の継承	・団員の高齢化（50 代以上の増加、10 代～40 代の減少） ・道具・衣装の維持管理の負担増 ・神楽の「エンタメ化」と「神事（本物）」のバランス調整
③上演機会と認知度	・主要大会の来場者数の大幅減少 ・神楽大会数が減少し、上演機会そのものが減少 ・情報発信の不足
④観光活用と経済循環	・インバウンド受入対応の遅れ（多言語対応、体験コンテンツ未整備） ・観光消費額の伸び悩み
⑤連携・協力体制	・神楽団間の連携や情報共有が不十分

第３章　計画の基本事項

１　基本理念

神楽文化が花ひらくまち　北広島

本計画の基本理念は、「神楽文化が花ひらくまち　北広島」です。これは、神楽と神楽に関連する活動が活発で華やかに栄える北広島町の姿を表現したものです。「花ひらく」という言葉には、神楽文化の継承・発展、担い手の育成、観光との融合、地域の誇りの醸成といった多様な意味が込められています。

本町の神楽は、稲作文化に根ざし、地域の歴史・信仰・産業と密接に結びついた「生きた文化」です。壬生の花田植とともに、町民にとって地域のアイデンティティそのものであり、世代を超えた交流による地域コミュニティの絆を深める役割を果たしています。この神楽文化が次世代に確実に継承され、さらに新たな価値を創造しながら「花ひらく」ことを目指します。

２　本計画における神楽振興の捉え方

本計画では、神楽振興を以下の３つの視点から捉え、総合的な施策を展開します。

【まもる】 伝統文化としての神楽の継承

神楽が持つ神事芸能としての本質的価値を守りながら、技芸の伝承、道具・衣装の維持管理、担い手の確保・育成を進めます。町民アンケートで「伝統の尊重と継承」が振興の重要事項として示されたことを踏まえ、神楽の本質的価値の保全を最優先に位置づけます。

【ひろげる】 神楽を核とした交流と賑わいの創出

神楽の上演機会の拡大、情報発信の強化、観光活用を通じて交流の輪を広げ、地域の賑わいを創出していきます。インバウンド観光客の増加傾向を追い風に、神楽を核としたツーリズムやグッズの開発、道の駅を拠点とした体験プログラムの展開を図ります。

【つなげる】 神楽を接点とした地域づくり

神楽を通じた世代間交流、地域間連携、関係人口の創出を推進し、持続可能な地域社会の形成に寄与します。神楽をしたいという理由での移住事例に見られるように、神楽が持つ「人をつなげる力」を最大限に活かす取り組みをしていきます。

3　目指す姿（将来像）

本計画の最終目標は、10 年後の令和 17（2035）年度に以下の姿が実現されていることです。この将来像は、各調査で明らかになった課題への対応と、町民・神楽団員・関係者の声を反映したものです。

図：目指す姿（将来像）の概念図

【将来像】

○ 神楽(定期公演・大会・イベント)の上演機会が増えている
○ 神楽団の継承体制が確立されている
○ 神楽が地域文化資源としてのブランド価値を確立し、町民の誇りとなっている
○ 神楽を接点とする交流が拡大し、関係人口の増加と関連産業の発展により観光消費額の向上に寄与している
○ 活動休止団体の再活動や新規団員の獲得により、神楽団数が維持・回復している
○ 行政・中間支援団体・神楽団・町民が協働する自立的な振興体制が構築されている

4　政策目標

目指す姿の実現に向けて、本計画では以下の 5 つの政策目標を掲げ、施策を展開します。

政策目標Ⅰ　神楽の担い手確保と次世代育成
若手人材マッチングシステムの構築、若年層を対象とした広報戦略、次世代育成プログラムの推進等により、神楽団の持続的な活動基盤を確立します。
政策目標Ⅱ　伝統文化の継承と技芸の向上
映像アーカイブの構築、ドキュメント作成、スキルアップ研修の実施、道具・衣装のシェアリング体制の整備により、神楽の文化的価値を守り高めます。
政策目標Ⅲ　上演機会の拡大と認知度向上
上演機会を増やすため定期公演の充実、デジタル情報発信プラットフォームの構築、ポップカルチャーとの融合、都市部・海外でのプロモーション展開により、神楽の魅力を広く発信します。
政策目標Ⅳ　神楽を核とした観光振興と経済循環
体験型ツアーの開発、グッズの開発と売上向上、拠点となる道の駅の受入機能向上、インバウンド対応の推進により、神楽を通じた地域経済の活性化を図ります。
政策目標Ⅴ　連携体制の強化と地域の誇りの醸成
各主体の連携体制の強化、若者の参画促進、町民の神楽への関与機会の創出により、地域に対する愛着や誇り（シビックプライド）を醸成します。

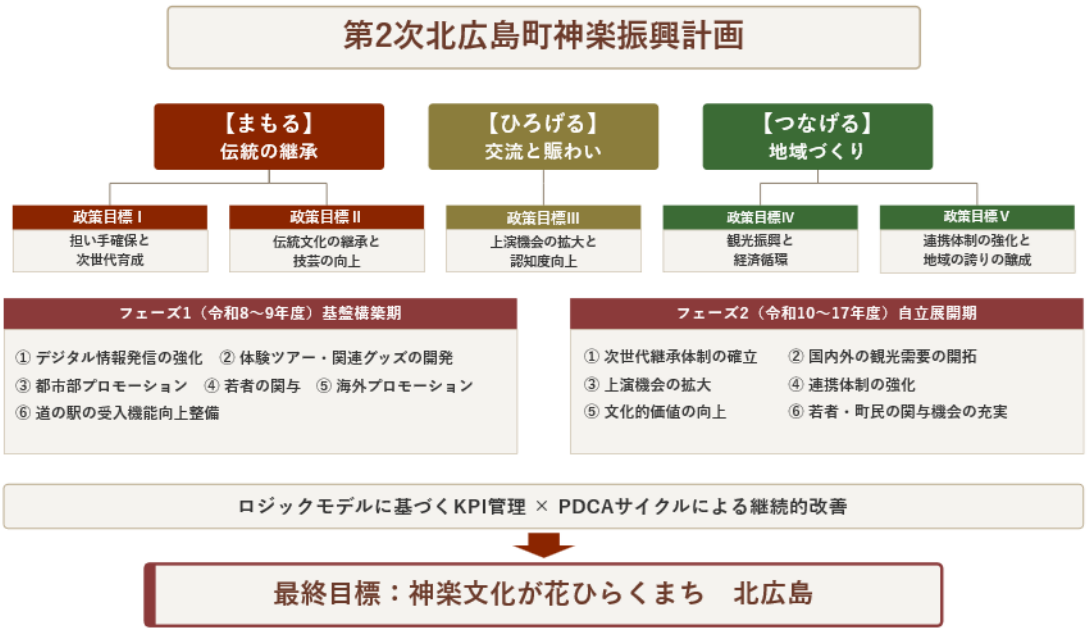
5　計画の体系

本計画は、基本理念「神楽文化が花ひらくまち　北広島」のもとに 5 つの政策目標を掲げ、各政策目標に対して具体的な施策と事業を展開します。

フェーズ 1（令和 8～9 年度）では、地方創生第 2 世代交付金事業「神楽と花田植を活用した活力創出プロジェクト」との連動により、6 つの事業柱を戦略的に推進します。具体的には、①デジタル情報発信の強化（HP・SNS 構築、動画コンテンツ制作）、②観光客向け体験ツアー開発（神楽鑑賞・衣装体験）、③都市部でのプロモーション展開（大都市圏での神楽公演・PR イベント）、④若者の関与（高校生・大学生のボランティア参画）、⑤海外プロモーションの実施と国際的な発信強化、⑥道の駅の受入機能向上整備です。

フェーズ 2（令和 10～17 年度）では、交付金に依存しない自立的・持続的な展開を図ります。フェーズ 1 で構築した基盤（デジタルプラットフォーム、体験プログラム、プロモーション、施設環境、人材ネットワーク）を活かし、事業の質的向上と量的拡大を図ります。

各施策の進捗は KPI によりモニタリングし、PDCA サイクルを通じた継続的な改善を行います。中間年度（令和 12 年度）には中間評価を実施し、社会環境の変化や事業の進捗状況を踏まえて後半期間の施策を見直します。



図：計画の体系図

6 フェーズ別の重点方針

（1）フェーズ 1（令和 8 ～9 年度）：基盤構築期

フェーズ 1 は、本計画の成否を左右する最も重要な時期です。地方創生交付金を活用し、以下の重点方針のもとに事業を集中的に実施します。

■ 重点方針 1：情報発信基盤の構築

一元的に情報発信を行うデジタルプラットフォーム（多言語対応 HP、SNS アカウント、動画チャンネル）を構築します。また、次世代の担い手である高校生・大学生の感性とスキルを活かしたコンテンツ制作を推進するなど、若者の視点による魅力発信を行います。

■ 重点方針 2：体験コンテンツの開発

定期公演の充実と新たなグッズ開発を行い、神楽の認知度を向上させます。また、神楽鑑賞と地域資源を組み合わせた体験型ツアーを開発・商品化の検討を行います。インバウンド向け神楽ツアーを含む多様なプランを造成します。

■ 重点方針 3：受入環境の整備

道の駅舞ロード IC 千代田の施設改修（舞台装置の改修、デジタルサイネージ導入など）を実施し、神楽公演の拠点施設としての機能を強化します。

■ 重点方針 4：担い手確保の仕組みづくり

若手人材マッチングシステムの構築、体験教室・ワークショップの定期開催、高校生・大学生のボランティア参画促進などにより、神楽団の持続的な活動基盤を確立します。

（2）フェーズ 2（令和 10～17 年度）：自立的展開期

フェーズ 2 は、フェーズ 1 で構築した基盤を活かし、交付金に依存しない自走型の神楽振興を展開する時期です。以下の重点方針のもとに事業を推進します。

■ 重点方針 1：次世代継承体制の確立

教育機関と連携した神楽教室やワークショップの開催、また、子ども神楽大会の開催などを通じて、子どもたちが神楽に触れる機会を充実させるとともに、高校や高等教育機関等との連携により、若者が神楽の担い手として活動したり、プロモーション活動に主体的に参画する仕組みを構築します。

■ 重点方針 2：国内外の観光需要の開拓と上演機会の拡大

フェーズ 1 で整備した多言語対応の情報発信基盤と受入環境を活かし、国内外の観光需要の開拓を進めます。広島市内の宿泊施設や旅行エージェントとの連携により、観光客の誘客を促進します。海外プロモーションの成果を基に、誘客ターゲットの拡大を図ります。

また、町内の神楽大会の活性化ならびに定期公演の充実を通して、神楽団の上演機会の拡大を図ります。

■ 重点方針 3：連携体制の強化と文化的価値の向上

関係者間の連携体制を強化し、定期的な進捗報告会を通じて情報共有の場を設けます。また、神楽大会や定期公演、プロモーション活動を通じて中国地方における神楽文化圏としてのプレゼンスを高めるとともに町民が神楽に関与する機会の充実と地域愛の醸成を図ります。

第 4 章　施策の展開

本章では、5 つの政策目標ごとに具体的な施策と事業を示します。

政策目標Ⅰ　神楽の担い手確保と次世代育成

神楽団の持続可能な活動基盤を確立するため、若手人材の確保と次世代の育成を最優先課題として取り組んでいきます。20 代団員の増加が神楽団の活動水準を直接的に向上させるという統計的データ（回帰分析：20 代 1 人増で練習頻度 0.23 段階上昇、年間出演 1.9 回増加）を踏まえ、戦略的な人材マッチングと育成の仕組みを構築し、現在の神楽団数を維持することを目指します。

1　若手人材マッチングシステムの構築

事業	取り組み内容	実施主体
神楽団員マッチング・若年層向けの広報戦略	神楽に興味を持つ若者（高校生・大学生・UIJ ターン者等）と、団員を求める神楽団をつなぐマッチング事業を実施します。定期的な体験教室やワークショップを開催します。	商工観光課 NPO 広島神楽芸術研究所 神楽協議会
合同神楽団の体制の検討	国内外の上演要請に応えるため、複数の団体が協力して上演を行う「合同神楽団」の体制の構築を検討します。	神楽協議会 商工観光課

2　次世代育成プログラムの推進

事業	取り組み内容	実施主体
子ども向け神楽教室・体験プログラム、神楽大会の充実	教育機関と連携した神楽教室やワークショップの開催、また、子ども神楽大会の開催などを通じて、子どもたちの神楽を見る・触れる・活動する機会を充実させるとともに、将来の担い手となる人材を育成します。	神楽協議会 教育委員会 NPO 広島神楽芸術研究所
高校生・大学生の観光ボランティア参画	高校や高等教育機関等との連携により、若者が神楽の担い手やプロモーション活動に主体的に参画する仕組みを構築します。	教育委員会 各教育機関 観光協会 神楽協議会

政策目標Ⅱ　伝統文化の継承と技芸の向上

神楽が持つ神事芸能としての本質的価値を守りながら、技芸の伝承と向上を図ります。町民アンケートで「伝統の尊重と継承」が振興の最重要事項（38.7%、1 位）と認識されていることをふまえ、デジタル技術を活用した記録・保存・伝承の仕組みを整備します。神楽面師へのヒアリングでは職人の高齢化と後継者不在の深刻さが報告されており、道具・衣装の維持管理体制の整備も急務です。フェーズ 1 では映像アーカイブの構築と技芸研修体制の整備を行い、フェーズ 2 では蓄積された記録資料を活用した体系的な伝承プログラムの確立を目指します。

1　映像アーカイブの構築と文化記録の保存

事業	取り組み内容	実施主体
映像アーカイブ・ドキュメント化	各神楽団の演目を高品質な映像で記録・保存するアーカイブシステムを構築します。このほか文書での記録も行います。これらは技芸の伝承資料として活用するとともに、情報発信プラットフォームでの公開により、神楽の認知度向上を目指します。	神楽協議会 教育委員会 NPO 広島神楽芸術研究所
神楽面・衣装・道具の記録と保全	神楽面工房や道具職人の技術を映像・文書で記録し、後継者育成の教材として活用します。また、職人の後継者不足に対応するため、技術継承プログラムの検討を行います。	神楽協議会 教育委員会 NPO 広島神楽芸術研究所

2　スキルアップ研修と団員間交流の促進

事業	取り組み内容	実施主体
勉強会・スキルアップ研修の実施	神楽団同士の交流・合同練習の機会を設け、技芸の向上と団員間の交流を促進します。外部講師の招聘や他地域の神楽団との交流を実施します。	神楽協議会 商工観光課 NPO 広島神楽芸術研究所

政策目標Ⅲ　上演機会の拡大と認知度向上

神楽の上演機会を拡大し、デジタル技術を活用した情報発信を強化することで、町内外における神楽の認知度を向上させることを目指します。

町民アンケートの回帰分析で、「知る・観る」機会の創出が関与意向の向上の鍵であることが確認されており、上演機会と情報発信の両面からアプローチしていきます。

各主要大会の観客数を最盛期の水準に回復させるとともに、上演機会と団員規模が密接に関連している調査結果をふまえ、新たな上演機会を創出し、神楽団の「規模の罠」による悪循環を断ち切ることを目指します。

1　定期公演の充実と上演機会の拡大

事業	取り組み内容	実施主体
定期公演の充実	道の駅舞ロード IC 千代田の機能向上を行い、町内における定期公演数を拡大させます。	神楽協議会 指定管理者
町内主要神楽大会の活性化	町内の神楽大会を活性化し、来場者数の回復・増加を図ります。	神楽協議会 観光協会

2　デジタル情報発信プラットフォームの構築

事業	取り組み内容	実施主体
伝統芸能ホームページ・SNS の構築と運用	情報発信を一元的に発信するホームページと SNS アカウントを構築します。インバウンド対応として多言語化を行い、公演スケジュール、演目紹介、アクセス情報等を集約します。	商工観光課 観光協会
動画コンテンツの制作・配信	SNS を活用した動画コンテンツの制作・配信を推進します。高校生・大学生の感性とスキルを活かし、海外向け英語字幕付き紹介動画の制作等も実施します。	商工観光課 観光協会
デジタル発信研修会	神楽団自身が効果的な情報発信手段を学ぶ研修会を開催します。	商工観光課 観光協会 神楽協議会

3　都市部・海外でのプロモーション展開

事業	取り組み内容	実施主体
大都市圏での神楽公演・PR イベントの実施	広島市内をはじめ、大都市圏での神楽公演や観光 PR イベントを実施します。	商工観光課 観光協会
海外プロモーションの実施と国際的な発信強化	神楽を海外の文化イベントや日本関連フェスティバルで上演し、国際的な関心の喚起と文化的評価の向上を図ります。翻訳・通訳人材の育成・確保も並行して進めます。	商工観光課 観光協会

政策目標Ⅳ　神楽を核とした観光振興と経済循環

神楽を核としたツーリズムの開発と受入環境の整備により、交流人口・関係人口の拡大と地域経済の活性化を図ります。体験ツアー開発・道の駅整備と一体的に推進し、「稼ぐ力」の向上を目指します。

1　体験型ツアーの開発とツーリズムの推進

事業	取り組み内容	実施主体
伝統文化体験ツアーの開発	神楽鑑賞、衣装体験、花田植見学などを組み合わせた体験型ツアーの検討を行います。宿泊施設との連携による滞在型プランの造成も推進します。	観光協会 指定管理者
インバウンド向け神楽ツアーの開発	関係者ヒアリングで即時着手可能な施策として評価されたインバウンド向け神楽ツアーを開発します。多言語対応のガイドプログラムを整備し、外国人観光客の誘客を促進します。	観光協会

２　道の駅の受入機能向上

事業	取り組み内容	実施主体
受け入れ拠点となる施設改修	神楽上演可能な舞台設備の改修やデジタルサイネージの導入を行い、初めて鑑賞する観光客やインバウンド観光客にも分かりやすく神楽の魅力を伝えられる環境を整備します。	商工観光課

３　関連グッズ開発と「稼ぐ力」の向上

事業	取り組み内容	実施主体
神楽関連グッズの開発・販売	神楽面、衣装ミニチュア、キーホルダー、神楽モチーフのお土産品など、伝統的なものに加え、アニメなどの新しいポップカルチャーとのコラボなど多様な関連グッズを開発・販売します。 道の駅等での物販に加え、オンラインショップの展開や、体験ツアー参加者向けの記念品としての販売も検討します。	指定管理者 観光協会
神楽ディナーショーなどの高付加価値コンテンツの開発	神楽鑑賞と地元食材を活かした食事を組み合わせたディナーショーを開発します。北広島町産の食材を活かしたメニューと、迫力ある神楽の共演により、体験の高付加価値化を図ります。	指定管理者

４　自走型経済モデルの確立

事業	取り組み内容	実施主体
観光消費額の持続的拡大	リピーター獲得と新規顧客開拓を進め、観光消費額の持続的拡大を図ります。地域内での経済循環を促進するため、地元事業者との連携を強化し、町内観光関連産業の充実を図ります。	観光協会 指定管理者

政策目標Ⅴ　連携体制の強化と地域の誇りの醸成

神楽団・神楽協議会・中間支援団体・町民・教育機関・行政の連携体制を強化し、神楽を地域の誇り（シビックプライド）としての醸成を図り、将来の自立的な運営体制の基盤を築いていきます。

１　協働体制の構築

事業	取り組み内容	実施主体
関係者間の連携体制の強化	神楽協議会、NPO 法人広島神楽芸術研究所、指定管理者、教育機関等との連携体制を強化し、定期的な進捗報告会・情報共有の場を設けます。	商工観光課

２　町民の神楽への関与機会の充実

事業	取り組み内容	実施主体
ガイド・公演支援・情報発信等のボランティア育成	神楽公演における案内・解説ガイド、大会スタッフ、情報発信サポーターなど、「ささえる」側の若者を含めた参画機会を充実させます。また、町民が神楽に関与することで、シビックプライドの醸成を図ります。	観光協会 商工観光課

３　企業版ふるさと納税等の外部資金の活用

事業	取り組み内容	実施主体
企業版ふるさと納税の推進	神楽振興を企業版ふるさと納税の重点テーマとして位置づけ、寄付額の増加を図ります。	はなえーる

第 5 章　計画の着実な推進と進行管理

1　成果指標（KPI）

本計画の進捗を客観的に把握するため、ロジックモデルに基づく成果指標（KPI）を設定します。フェーズ 1（令和 8～9 年度）については、地方創生交付金事業の KPI と整合を図ります。フェーズ 2 以降の目標値は、フェーズ 1 の成果を踏まえて中間見直し時に再設定する計画ですが、計画策定時の見通しとして以下の値を設定します。

【KPI の設定根拠】

各 KPI の設定根拠は以下のとおりです。観光消費額については、他の観光振興施策と多角的な連携を図ることで 2024 年度の町の観光消費額を基準に毎年 10%程度の増加を見込んでいます。

高校生・大学生ボランティア参加数は、SNS やプログラム強化により拡大を目指します。神楽団数は、現在の団体数を維持しつつ、休止団体の活動再開を目指します。HP アクセス数は、開設初年度 2,000PV とし、SNS 連動・インバウンド向け発信により段階的に拡大する計画です。主要神楽大会の来場者数は、施設整備やイベント・プロモーションとの連動により回復を目指します。

成果指標	現状値（2025 年度）	目標値（2028 年度）	目標値（2031 年度）	目標値（2035 年度）
観光消費額	20.43 億円	27.18 億円	30 億円	35 億円
高校生・大学生ボランティア参加数	0 人	40 人（累計）	60 人（累計）	80 人（累計）
活動神楽団数(子ども・部活含む)	64 団体	64 団体	64 団体	64 団体
伝統芸能 HP アクセス数	0PV	10,000PV	30,000PV	80,000PV
町内の神楽大会の来場者数（芸石および各地域の大会）	2,590 人	3,000 人	3,250 人	3,500 人
舞ロード定期公演来場者数	1,200 人	1,500 人	1,800 人	2,000 人
過去 1 年に神楽を鑑賞した住民の割合	88.9%	90%	91%	92%

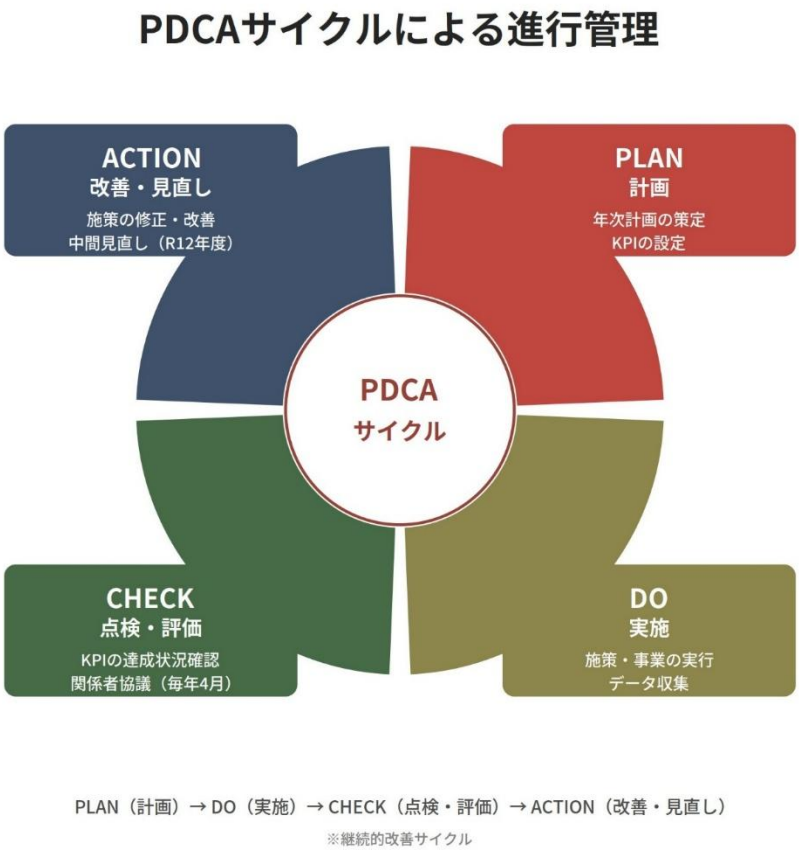
2　計画の着実な推進

本計画は、5 つの政策目標の達成に向けた具体的な取り組みに基づき、年次計画を別途作成し、施策に関わる関係団体等と密に連携して計画的な推進を目指します。フェーズ 1（令和 8～9 年度）は地方創生交付金事業の実施計画に基づく年次スケジュールにより推進し、フェーズ 2（令和 10～17 年度）は中間見直しの結果を踏まえた年次計画により推進します。

フェーズ 2（令和 10～17 年度）については、フェーズ 1 の成果と中間評価の結果を踏まえ、自立的な事業運営体制のもとで年次計画を策定します。新たな観光振興組織が事業の中心的な推進主体となり、行政は計画全体の調整と支援の役割を担います。

3　計画の進行管理

本計画の推進にあたっては、PDCA サイクルを繰り返すことにより、取り組みを継続的に改善していきます。具体的には以下の体制により進行管理を行います。



図：PDCA サイクルによる進行管理

資料編

1　北広島町神楽振興計画策定委員会 名簿

氏　名	所属・役職	
髙崎　義幸	星城大学 経営学部　准教授	委員長
宮上　宜則	北広島町神楽協議会　会長	副委員長
石川　一義	北広島町神楽協議会　副会長	委員
石川　泰典	北広島町神楽協議会　副会長	委員
池田　達哉	北広島町神楽協議会　副会長	委員
増田　　隆	北広島町　教育長	委員
林　　秀樹	NPO 法人広島神楽芸術研究所　理事長	委員
石井　誠治	NPO 法人広島神楽芸術研究所　理事	委員
湧田　裕樹	NPO 法人広島神楽芸術研究所　事務局	委員

2　計画策定の経過

年月日	会議名等	内容
令和 7 年 10 月	第 1 回策定委員会	振興計画策定のロードマップ 調査の設計
令和 7 年 11 月～令和 8 年 3 月	各種調査の実施	神楽団現況調査、団員アンケート、 町民アンケート、ヒアリング調査
令和 8 年 2 月	第 2 回策定委員会	調査結果の報告、計画骨子案の審議
令和 8 年 3 月	神楽協議会での報告	計画案の審議
令和 8 年 3 月	第 3 回策定委員会	計画の最終審議・答申

3　北広島町神楽団の現況調査結果

神楽団現況調査（令和 7 年度実施、45 団体回答）の主要な調査結果の概要を以下に示します。

■ 調査概要

本調査は、第 2 次北広島町神楽振興計画策定のため、町内 47 の神楽団を対象に実施したアンケート調査（回収率 95.7%、45 団体）の結果を分析・報告するものです。調査は、Google フォームを用いたウェブ回答方式で、団体の代表者または副代表に回答を依頼しました。調査期間は 2025 年 11 月 14 日から 11 月 30 日です。

■ 団員構成の概要

平均団員数 16.2 人（標準偏差 5.1 人）、最小 7 人～最大 29 人。男性 86%・女性 14%。年代別では、10 代 7.7%（55 人）、20 代 18.4%（132 人）、30 代 20.8%（149 人）、40 代 20.8%（149 人）、50 代以上 32.5%（233 人）。2015 年との比較で 10 代～40 代が減少、50 代以上が増加しており、10 年間で高齢化が進行。団員数区分の分布は、10 人以下 7 団体（15.5%）、11～15 人 12 団体（26.6%）、16～20 人 17 団体（37.8%）、21 人以上 9 団体（20.0%）となっています。

■ 活動状況の概要

練習頻度は週 2 回以上が約半数。年間平均出演 8.6 回（団体間格差大）。出演の内訳は奉納神楽が中心で、町内外のイベント・大会出演が続きます。平日昼間の出演対応については、「対応可能」と「対応困難」が拮抗しています。

■ 二極化構造（クラスター分析結果）

「活発型」15 団体（33%）：平均団員数 21.5 人、年間出演 15.8 回、練習頻度高い、新演目への挑戦に積極的。

「安定型」30 団体（67%）：平均団員数 13.6 人、年間出演 5.0 回、地域の奉納行事中心の活動。二極化の構造が統計的に確認されました。

■ 課題認識の概要

上位 3 項目は「若い団員の少なさ」64%、「団員数の少なさ」60%、「神楽と仕事・家庭の両立」58%。いずれも人材確保に関連しています。その他、「道具・衣装の維持管理費」「練習場所の確保」「出演料の低さ」も指摘されています。

■ 観光資源活用への意識

期待：「上演機会の増加」50%、「観光客との交流」34%、「後継者育成の促進」34%。
課題：「出演調整の難しさ」67%（最大）、「伝統への理解と尊重」58%。
有効な取り組み：「情報発信の強化」「定期公演の充実」「体験プログラムの開発」。

■ 回帰分析の主要結果

20 代の団員数が神楽団の活動を左右する最重要因子です。20 代が 1 人増加すると練習頻度 0.23 段階上昇、年間出演回数が約 1.9 回増加します。他の年代と比較して効果が際立って大きく、統計的に有意です。

■ 団員募集と情報発信

団員募集を行っている団体は約半数で、方法は「口コミ」「地域の紹介」が中心でした。情報発信媒体は SNS（個人アカウント）が最多ですが、団体としての公式アカウントを持つ団体は少数でした。出演料の適正水準については、現行水準を上回る金額を希望する声が多い結果となりました。

■ 他団体との連携

他の神楽団との交流・連携状況としては、「合同練習」「祭りでの共演」が主な形態。地区を越えた連携には発展の余地があります。

■ 自由記述のテキスト分析

自由記述をテキストマイニングした結果、「存続」「危機」「若手」「確保」が高頻度で出現しました。「人材マッチング」「財政支援」「練習環境」への要望が多く、共起ネットワーク分析では「若手-確保-課題」「支援-行政-要望」のクラスターが検出されました。

■ 政策提言（報告書より）

報告書では 5 つの政策提言を行っています。①喫緊の課題として若手人材マッチングシステムの構築、②中期的基盤強化として小規模団体への重点支援、③長期的持続可能性として次世代育成システムの確立、④観光連携として伝統と観光の両立、⑤情報・ノウハウの共有促進。

4　神楽団員の意識調査結果

神楽団員アンケート調査の主要結果の概要を以下に示します。（詳細は別冊報告書参照）

■ 回答者の属性

年代は 20 代～40 代が中心で、性別は男性が 8 割以上を占めています。職業は会社員が最多で、農業、自営業と続いています。居住エリアは北広島町内が大多数ですが、町外からの通勤者も一定数存在しています。神楽歴は 10 年以上のベテラン層が多数を占め、20 年以上の長期活動者も少なくありません。

■ 入団のきっかけと活動への意向

入団のきっかけとしては「家族の影響」が最多でした。幼少期から神楽に触れる環境があったことが大きな動機です。SNS 利用率は比較的高く、Instagram、Facebook、YouTube などを通じた情報発信に素地があります。若手確保や持続可能性への危機感が共有されています。

■ 練習・活動の課題

仕事との両立が最大の課題となっています。平日の練習時間の確保や、遠方からの通勤者の移動負担が指摘されています。また、道具・衣装の維持管理に関する経済的負担、練習場所の確保なども課題として挙げられています。

■ 神楽の将来と振興への意見

「自分の世代で神楽が途絶えてしまうのではないか」という不安の声が複数ありました。一方で、「神楽を通じた地域の活性化」「観光客との交流への期待」といった前向きな意見も多数ありました。観光活用については、「伝統を守りながら」という条件付きでの賛成が多数を占めています。

5　町民の神楽に対する意識調査結果

北広島町公式 LINE 登録者（有効回答：351 人）を対象とした町民アンケート調査の主要結果の概要を以下に示します。

■ 調査概要

本調査は、第 2 次北広島町神楽振興計画策定のため、北広島町公式 LINE 登録者を対象に実施した「神楽の振興と観光活用に関するアンケート調査」（2025 年 11 月 17 日～11 月 30 日）の結果を分析・報告するものです。有効回答数は 351 人でした。

■ 回答者の属性

年代は 40 代（80 人・22.8%）が最多で、次いで 50 代（68 人・19.4%）、60 代（64 人・18.2%）、30 代（55 人・15.7%）と続いています。性別は女性 192 人（54.7%）、男性 145 人（41.3%）で、女性が過半数を占めました（「その他」「無回答」を除く）。北広島町との関係年数は「10 年以上」が 278 人（79.2%）と大多数を占め、地域に根ざした住民層が回答しています。

■ 神楽との関わり・知識度

知識度（神楽を知っている 87.8%）、鑑賞経験（過去 1 年に神楽を鑑賞したことがある 88.9%）、「とくに関わっていない」49.6%ですが、神楽団所属者・元所属者は 43.3%でした。「地域の未来にとって重要な文化資源」の肯定率は 88.0%を占めました。他者推奨度を示す NPS は、+10.6 でした。外部発信意欲も 82～86%と高水準でした。

■ 観光活用への意識

観光活用への期待は「若者の関心・継承」70.9%、「知名度向上」67.0%が上位を占めました。懸念は「神楽団の負担増」49.6%が最大でした。振興の最重要事項は「伝統の尊重と継承」38.7%が最多でした。観光活用積極度への影響は小さいですが、「積極推進型」クラスターと「年代（高齢ほど積極）」が有意でした。

■ クラスター分析結果

町民を「積極推進型」（183 人・52.1%）、「バランス型」（123 人・35.0%）、「慎重・消極型」（45 人・12.8%）の 3 つのクラスターに分類しました。積極推進型は神楽への関与意向・文化意識・観光活用積極度のいずれも高く、神楽振興の推進力となる層です。バランス型は伝統の尊重を重視しつつ、観光活用にも一定の理解を示す層です。慎重・消極型は神楽への関与や発信に消極的で、体験機会の提供による取り込みが課題となる層です。

■ 回帰分析の主要結果

神楽知識度と鑑賞回数が関与意向（R^2=0.328）・文化意識スコア（R^2=0.110）の双方に有意な正の影響を示していました。年代・性別・関係年数による有意差はみられませんでした。クラスター（積極推進型・バランス型）を加えた文化意識スコアモデルは R^2=0.848 と非常に高い説明力を示しました。

■ 政策含意

以上の分析結果から、神楽への関与意向を高めるための最も有効な施策は、「知る・観

る」機会の創出であることが統計的に確認されました。年代や性別に関わらず、神楽に触れる機会を増やすことが、町民全体の文化意識の向上と振興への協力意欲の醸成につながります。

6　ヒアリング調査結果からみる現状

（1）神楽団ヒアリング

2025 年 11 月～2026 年 2 月にかけて神楽団（9 団体）および神楽関係事業者等（4 名）を対象にヒアリング調査を実施しました。分析の結果、以下の論点が抽出されました。

■ テキスト分析の概要

全 9 団体のインタビュー要約テキストを対象に形態素解析（MeCab）を実施し、名詞・動詞・形容詞を抽出しました。「神楽」（427 回）を筆頭に、「公演」（179 回）、「地域」（160 回）、「団員」（100 回）が高頻度で登場しています。「課題」「不足」「若手」「後継」といった課題系ワードと、「観光」「連携」「継承」「文化」「伝統」といった振興系ワードが拮抗していました。

■ 共起ネットワーク分析

同一文内に共起する名詞ペアをカウントし、出現頻度 4 回以上のペアを可視化しました。主要なクラスターとして、「担い手-不足-課題」「公演-機会-減少」「観光-活用-期待」「地域-連携-協力」が検出されました。これらのクラスターは、神楽団が直面する課題の構造を端的に示しています。

■ KJ 法的グルーピング

意見を親和図法により分類した結果、「担い手・後継者不足」「練習環境・装備の維持管理」「観光活用と伝統のバランス」「地域間連携の可能性」「情報発信の必要性」「行政支援への要望」が主要カテゴリーとして整理されました。

■ 感情・トーン分析

各意見をポジティブ、ネガティブ、改善要望に分類した結果、担い手不足に関するネガティブトーンが最も強い結果となりました。一方で、インバウンドや観光活用に関してはポジティブトーンが優勢であり、「チャンスがある」「可能性を感じる」といった前向きな発言が多く見られました。

■ 主な意見（抜粋）

「若い人が減って、あと数年で舞えなくなるかもしれない」「町外から来てくれる団員がいなければ成り立たない」「観光客が来てくれるのは嬉しいが、本来の神事としての意味を理解してほしい」「行政にはマッチングの仕組みを作ってほしい」「他の神楽団ともっと交流したい」「練習場所の確保が年々難しくなっている」等の意見がありました。

（2）関係者ヒアリング

観光協会会長、神楽字幕の翻訳者・司会、広島県民文化センター館長、神楽面師の 4 名を対象としたヒアリング調査を実施しました。

■ 主要事項

第一に、「文化継承の危機」と「インバウンド機会」が最大の 2 大テーマとして浮上しました。担い手・後継者不足は全員が最重要課題として認識し、ネガティブトーンが最も強い結果となりました。第二に、インバウンド向け神楽ツアーや多言語対応は即時着手可能な施策として高く評価されました。第三に、行政の縦割りと民間主導の格差が組織課題として共通して指摘されました。第四に、神楽の「エンタメ化」と「神事（本物）」のバランス調整が文化政策の核心として論じられました。

■ 振興計画への重要示唆

広島県民文化センターでの神楽公演がコロナ後に収支改善を果たしていることから、持続的なビジネスモデルの構築可能性が示されました。また、神楽面師からは職人の高齢化と後継者不在の深刻さが報告され、道具・衣装の維持管理体制の整備が急務であることが確認されました。観光協会会長からは、町内に観光振興を一体的に担う組織が不在であることが最大のボトルネックとして指摘されました。

■ 頻出キーワード Top 20

形態素解析の結果、頻出キーワード上位は「神楽」「公演」「観光」「広島」「文化」「観客」「地域」「インバウンド」「演目」「情報」「ガイド」「伝統」「ツアー」「翻訳」「集客」「発信」「体験」「戦略」「英語」の順でした。

7　本町の神楽活動団体マップ

出所：北広島町神楽協議会・北広島町商工観光課「2026 年度 北広島町神楽スケジュール」

（全 64 団体：うち本計画策定における調査対象の神楽団は 47 団体）

no	団体名	地域	no	団体名	地域
①	阿坂神楽団	豊平	⑩	上川戸神楽団	千代田
②	今吉田神楽団	豊平	⑪	中川戸神楽団	千代田
③	上石神楽団	豊平	⑫	曙神楽団	千代田
④	琴庄神楽団	豊平	⑬	八重西神楽団	千代田
⑤	戸谷神楽団	豊平	⑭	春木神楽団	千代田
⑥	中原神楽団	豊平	⑮	今田神楽団	千代田
⑦	西宗神楽団	豊平	⑯	有田神楽団	千代田
⑧	吉木神楽団	豊平	⑰	東山神楽団	千代田
⑨	龍南神楽団	豊平	⑱	山王神楽団	千代田

no	団体名	地域	no	団体名	地域
⑲	本地中組神楽団	千代田	㊷	川小田神楽団	芸北
⑳	上本地神楽団	千代田	㊸	細見神楽団	芸北
㉑	砂庭神楽団	千代田	㊹	大暮神楽団	芸北
㉒	河内神楽団	千代田	㊺	移原神楽団	芸北
㉓	旭神楽団	千代田	㊻	高野神楽団	芸北
㉔	朝間神楽団	大朝	㊼	溝口神楽団	芸北
㉕	筏津神楽団	大朝	㊽	上石子供神楽会	豊平
㉖	枝之宮神楽団	大朝	㊾	吉木子供神楽団	豊平
㉗	大塚神楽団	大朝	㊿	今吉田子ども神楽団	豊平
㉘	郷之崎神楽団	大朝	51	阿坂こども神楽会	豊平
㉙	小市馬神楽団	大朝	52	有田子ども神楽団	千代田
㉚	磐門神楽団	大朝	53	東山子ども神楽団	千代田
㉛	宮迫神楽団	大朝	54	八重西子ども神楽団	千代田
㉜	宮之庄神楽団	大朝	55	南方子ども神楽	千代田
㉝	八栄神楽団	大朝	56	山王子ども神楽クラブ	千代田
㉞	富士神楽団	大朝	57	千代田高校神楽部	千代田
㉟	長尾組神楽団	芸北	58	筏津子ども神楽団	大朝
㊱	田尾組神楽団	芸北	59	大塚子ども神楽団	大朝
㊲	雄鹿原上組神楽団	芸北	60	新庄高校郷土芸能同好会	大朝
㊳	雄鹿原下組神楽団	芸北	61	雲月女性神楽同好会	芸北
㊴	小原神楽団	芸北	62	雄鹿原子ども会	芸北
㊵	苅屋形神楽団	芸北	63	やえ神楽くらぶ	千代田
㊶	才乙神楽団	芸北	64	加計高校芸北分校神楽部	芸北

8　用語解説

用語	解説
インバウンド	訪日外国人旅行者およびその旅行のことです。近年、広島県内の外国人宿泊者数は大幅に増加しており、本計画では神楽を活用したインバウンド観光の推進を重要施策と位置づけています。
NPS	Net Promoter Score（ネット・プロモーター・スコア）の略です。推奨者の割合から批判者の割合を引いた指標で、ブランドへの愛着度を測定します。本町の神楽 NPS は+10.6 でした。
規模の罠	学術用語ではありませんが、本調査の結果、団員数の少ない神楽団が、練習頻度の低下・出演機会の減少・SNS 発信力の不足・後継者育成の困難といった複数の課題が連鎖的に作用し、さらなる団員減少を招く悪循環に陥っている構造的課題が示されました。
KPI	Key Performance Indicator（重要業績評価指標）の略です。計画の達成度を定量的に測定するための指標です。
シビックプライド	市民が地域に対して持つ誇りや愛着のことです。本計画では、神楽を通じた町民のシビックプライドの醸成を重要な成果と位置づけています。
関係人口	移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々のことを示します。神楽ボランティアや体験ツアーリピーター等が該当します。
壬生の花田植	2011 年にユネスコ無形文化遺産に登録された北広島町の伝統行事。田植え作業の中で田の神を祭り、囃子に合わせて花鞍の牛と早乙女が苗を植える光景が特徴的です。毎年 6 月第 1 日曜日に開催。
神楽協議会	北広島町内の神楽団の連絡調整や振興を担う協議会組織です。本計画の策定においても中心的な役割を果たしています。
クラスター分析	データの類似性に基づいて対象をグループに分類する統計手法です。本計画では、神楽団を「活発型」と「安定型」に分類するために使用しました。
回帰分析	ある変数（目的変数）が他の変数（説明変数）によってどの程度説明できるかを分析する統計手法のことです。本計画では、団員総数と 20 代団員数が活動水準に与える影響の定量化に使用しました。
テキストマイニング	大量のテキストデータから有用な情報を抽出する分析手法。ヒアリング調査の結果分析において、頻出語の抽出や共起ネットワーク分析に使用しました。
PDCA サイクル	Plan（計画）、Do（実施）、Check（点検・評価）、Action（改

	善・見直し）の 4 段階を繰り返し行うことで、継続的に業務を改善していく考え方です。
地方創生交付金	地方公共団体が地方版総合戦略に基づいて行う事業に対して、国が交付金を交付する制度。本計画のフェーズ 1 は第 2 世代交付金事業と連動しています。
道の駅舞ロード IC 千代田	中国自動車道千代田 IC 隣接の道の駅。ステージ付きレストラン「響」を備え、神楽公演の拠点として活用が期待される施設。指定管理者制度により株式会社きたひろ市場が運営しています。
はなえーる	北広島町のまちづくり会社（地域商社）。観光協会と統合した新たな観光振興組織の設立が検討されています。
フェーズ	計画の実施段階を区分する概念です。本計画では 10 年間の計画期間をフェーズ 1（前期：2026～2027 年度）とフェーズ 2（後期：2028～2035 年度）に分け、段階的に施策を展開します。

第 2 次北広島町神楽振興計画
北広島町